

---

# 蒼黒の契りの章

『ラストクロニクル』ショートストーリー

---

作：澄佳 歩依 監修：滝 舜一

## 序章

「お前は、世界一強い魔術師になるんだ」

幼い頃。ライーサの父、ゲオルグはいつだって眉間に皺を寄せた顔で厳しかった。

「あなたは我が一族の誇りだわ」

ライーサの母、エリーゼはいつだってそう言って、幼いライーサを館へ大事に閉じ込めた。

暗い森の中では、降りしきる雨さえも冷たく重い。

闇が、暗い雨粒も、暗い濃霧も、暗い夜気さえも飲み込んで黒を飽和させ、ライーサの部屋はいつだって、吹き荒ぶ狂風の音と、瞬間その黒を責め立てるように弾け轟く雷の光と、黒雨が窓硝子を激しく叩く音だけでいっぱいだった。

ライーサは父と母のことは嫌いではなかった。確かに父はいつも眉根に皺を寄

せて、魔術の特訓にはたびたび怒鳴り散らすほど厳しく当たったが、ライーサに手を上げることは決してしなかったし、母はライーサを過保護なほどに館内に囲っていたが、彼女を見る眼差しはやわらかいもので、魔術の特訓で傷付いたライーサを優しく手当てしてくれたのは、いつも母だった。

稀まれに館へ姿を見せる親戚らも、ライーサには優しかった。

年上や年配の親族らには頭を撫なでられ、歳の近い者には親生まれ、幼い者には懐かれた。

ライーサの館が親族内では一番の広大さを誇っていたから、いつも一族が揃ったのパーティーは、その豪奢ごうしゃな館で行われるのが常だった。

そして、ある日。それはライーサが十歳の誕生日を迎えた日のことだ。

「おお……!!」

親族たちがどよめき、子供たちはその瞳を輝かせて、その技に見惚れる。

「ライーサ、イーサ！ ディア、ヴァル、アスター！」

再び呪文を唱え、魔法の杖を振りかざす。手にしたシルクハットの中から、軽

快な音を立てて、きらめきが溢れ出る。

——ポンツ

溢れ出たきらめきの中から現れたのは、黒い小さなお化けのような、目の光る不思議な生き物だった。

「お呼びでしょうか、ライーサお嬢様」

その小さな従者が、ライーサに向かって頭を垂れた。

「わたくしのお供、『セバスタ』です」

ライーサははにかみながら、親族の者に、自ら作り出した小さな下僕——影男と呼ばれる使い魔、『セバスタ』を紹介した。たちまち、わっと親族中が沸き立つ。

「その歳で、もう使役の者を呼び出せる術を会得しているとは！」

「さすが我が一族きつての天才だな！」

「ライーサお姉ちゃん、私にも魔術教えて！」

親族はこぞつてライーサを褒め称える。父と母の誇らしそうな顔を見たライーサも、表情にこそ出さないものの心中は誇らしさに満ちあふれていた。

「さあ、今日は祝いの席だ！ 皆存分に楽しんで行ってくれ！」

ライーサの父、ゲオルグが親族らに声をかける。いつもは陰鬱いんうつとした館の中も、今日ばかりはきらびやかな光に満ちていた。

「改めて、誕生日おめでとう、ライーサ」

皆が沸く中、静かに声をかけてきたのは、ライーサの母、エリーゼだった。

「あなたが生まれてきてくれて、本当に良かったわ」

エリーゼは、ライーサの薄桃色の髪を優しく撫なでる。母譲りのこの髪の色を、ライーサはとても気に入っていた。

「あのね、ライーサ」

エリーゼは、愛おしそうに彼女の髪を撫でながら、目を細めて語りかけた。

「ここバストリアは、確かに『魔王国』と呼ばれている場所。けれどもあなたには、優しい心を持って生きて行ってほしいの」

言いながら、母の瞳が静かにライーサを見つめる。

「ここでは、それはとても難しい事かもしれない。だからこそ、強くなつてほし

いの。そうでなければ本当に人に優しくすることはできないから……。お父様もあんな恐い顔をしているけれど、それを願ってあなたに厳しく接しているのよ。あなたには、何があってもいたずらに人を恨んだり、憎んだりするような人間にはなつてほしくないの」

エリーゼは最後にそつと微笑んでから、娘に首をかしげて問いかける。

「……できるかしら？」

己の母の言葉に、ライーサは元気良くなつた。

「できますわ、お母様！ だつてわたくし、この一族で一番の天才魔術師ですもの！ もつと魔術を練習して、もつと強くなつて、皆に優しくしてあげますわ！」  
その無邪気な返答を聞いてエリーゼは嬉しそうに笑い、娘を抱きかかえた。

「良いお返事ね。さすが私の娘だわ。さあ、広間に戻りましょう。あなたの誕生日の贈り物も、ちゃーんと用意して……」

その時。大広間の扉が、一際大きな音を立てて開かれた。額に汗をびっしょりとかいて転がり込んで来たのは、館の召使いである。年老いた彼はそこに足を踏

み入れるなり、必死の形相でゲオルグのもとへ駆け寄った。

「旦那様！ 大変です、侵入者が……何者かが館へ押し入ろうとしています！」

その台詞に、ゲオルグの顔付きがさつと険しくなる。それまで華やかな雰囲気  
に沸いていた親族らも皆、しんと静まり返って一気に固い表情を見せた。そんな中、ゲオルグは眉根を寄せ、低い声で召使いの者に問う。

「……何者だ。人数は？」

「分かりません。かなりの数で押し寄せて来ました。警護の者や、旦那様の使い魔も歯が立たず……」

警護の者はともかく、己の使い魔も歯が立たなかったと聞いて、ゲオルグの眉間の皺は、一層深くなった。

「今すぐお逃げください、旦那様方！ 敵はすぐそばまで来ておりま……」

す、と、避難を促す言葉が最後まで紡がれる前に。突如、彼の口から鮮血がほとばしる。豪華な絨毯じゅうたんを死の赤で濡らして倒れた彼は、白目を剥むいて、すでにこ  
と切れていた。

「きゃあああつ」

突然の事に若い女性たちから悲鳴が上がる。一方、男性たちは厳肅な面持ちで、手にしたグラスや食器をテーブルへと置き、懐ふとこから一族の使う魔杖まじょうを取り出し始めた。ゲオルグは、倒れた召使いの元へ膝を付き、掌てのひらでその臉まぶたを下ろさせた。

「呪殺の技……さては、ジユドの手の者か。まったく、この国で恨みを買わずに生きる事は難し過ぎるな」

ゲオルグは呟くように言つて、自らも懐から杖を取り出して立ち上がった。『苦痛の魔術師』の異名を取るジユドは、ことあるごとに彼を目の敵にしていた、いわば『商売敵』である。野心と冷酷さに満ちたその目つきが、ゲオルグは以前から気に食わなかつた。それは相手も同様のようで、とある魔導具をめぐる事件がきっかけで、ついに二人は、激しく対立するに至っていたのだ。

「楽しく過ごしてもらつていたところ、すまない。この襲撃は、どうやら私の存在を邪魔に思う者の仕業らしい」

親族たちにかげられたゲオルグの声に応えるように、壮年の男が杖を掲げ、気

勢を上げる。

「そんな輩やからなど、一族の誇りにかけて、返り討ちにしてやるわい！ 我らを敵に回したこと、後悔させてやる！」

激しい言葉に、他の男性たちも戦意を露あらわわにしていく。ゲオルグが、冷静な顔で再び口を開いた。

「この館には我が一族、先祖代々の宝も多く秘蔵されている。何としても、それだけは守り抜かねばならない」

親族たちも彼のその台詞に頷き、顔に決意の色をみなぎらせた。

「お父様……？」

ライーサが震え声で呼ぶのに答えず、ゲオルグはいつもの眉間に皺を寄せた顔でちらりと娘の顔を見ただけだった。そして彼は、すぐに母の方へと向き直った。「お前たちは、まだ戦えない者たちと一緒にすぐに逃げなさい。エリー、君は杖を持っているな？ 何としても逃げ切るんだぞ」

エリーゼは、強ばった表情のままであなづき、ライーサをしっかりと抱きしめた。

「気をつけてね、あなた……」

エリーゼが夫に心配げに言うのと、ゲオルグは「大丈夫だ」と静かに応え、エリーゼの頬に手を当てた。

「心配するな、エリー。他の皆を……ライーサを、頼んだぞ」

そう言つて、ゲオルグは妻の頬に軽く口づけを落とす。そして、エリーゼに抱かれたライーサを再度見た。

「ライーサ」

その顔は。

「ライーサ。強く生きなさい」

その顔は、ライーサが今まで見たことがないような、優しい微笑みを浮かべていた。

「お父さ……」

しかしライーサが呼びかけるより早く、母がその手を引いて駆け出した。

「皆！ 私に付いて来て！」

その母の声は、心なしか震えているようにライーサには感じられた。

幼い親族や女性たち、また護衛として付けられた若い青年も共に、ライーサは母に手を引かれ、館の地下にある隠し通路の中を走り抜けていく。

やがて一行は、森の中へ通じる出口の隠し扉までようやく辿り着いた。若い青年が率先して立ち、その重い扉を、軋ませながら開いていく。

森の中は予想通り、暗く鬱蒼としていた。幸い雨は降っておらず、風だけが木々の間から不気味な音色を響かせている。

エリーゼは、出口のそばに隠してあったランプに明かりを灯し、ひとまずの光源を確保する。

森の木々を隔てた少し向こうに、ライーサの館の屋根が見える。

「ここまで来れば、一安心だわ。皆、街の方までもう少し……」

エリーゼが息を整え、その場の皆に言いかけたその時。

「うわあああっ！」

突如、大きな悲鳴が上がった。若い青年のそれだ。エリーゼがランプの光を、すぐさま声がした方向へ向ける。

そこには……。そこには、木の幹に血の跡を残しながら、もたれかかるようにしてこと切れている青年の姿があつた。

「ひっ」

その凄惨な姿に、親族の誰かが短い悲鳴を上げた。

「て、敵だわ！ 皆、逃げ……」

「きゃああああつ」

声上がる中、一人の女性が口から血を吐き出しながら倒れる。そして、また、さらに、もう一人……。

ライーサの顔色が恐怖で紙のように白くなり、彼女はそれきり言葉を失う。そんな中、エリーゼは杖を握り、固い表情で闇の中へとその先を向けた。

「エリーゼ、リーゼ、プラナス、イクシア、ローゼリア！」

彼女は呪文を唱えながら杖を振りかざし、周囲に垂れこめる闇の中へと、光を

放射した。だが、そこには何者の姿も見つけることはできなかった。エリーゼが焦りに眉を寄せ、今一度、呪文を唱えようとした瞬間。切り裂くような悲鳴が、相次いで森の中に響き渡った。そしてライーサが見たのは、さっきまで館で笑顔で笑い合っていたはずの愛しい親族たちが、次々と血を流して地面に倒れ伏していく光景だった。

「あ……」

エリーゼは短く声を漏らすと、蒼白な顔をして、素早くライーサを抱きかかえ、とその場を駆け出した。だが、すぐにその足が止まる。

ライーサがそつと顔を上げると、周囲には無数の黒い影が立っていた。ランプのぼんやりとした明かりの中で、ライーサは見た。それは、おぞましい死の群れだった。全身から腐臭を漂わせ、ぼろきれのような衣に身を包んだ人影。溶け落ちかけた眼球を眼窩から垂れ下がらせた、狼の屍。朽ちた兜の下からぼっかりと恨みを残した眼窩と、白骨のみが覆う顔のぞかせた骸骨の兵士。

「不死兵の術……!!」

エリーゼが、青くなった唇でつぶやく。周りを囲んだ死の影の前、もはや逃げ場はないように思えた。だが気丈にも彼女はライーサを抱きかかえたまま杖を握り、再度振りかざしてさきほどの呪文を唱えた。たちまちその先から光弾が魔物たちに向かつて発射される。しかし、それは敵にぶつかる寸前で掻き消えてしまった。まるで薄いヴェールのような魔力の盾で、魔物たちが守られているようでもある。

「そんな……っ」

悲痛な声を上げると、エリーゼは唇を噛み、今度はライーサを地面に下ろし、両手で杖に渾身の力を集約させようとする。

「エリーゼ、リーゼ！ プラナス！ イクシア！ ローゼリアッ！」

力強く呪文を唱え、先ほどよりも強い光を魔物らに向かつて発射させた。先ほどよりは強い力をこめたそれは、何とか不死者の群れの一体を包みこみ、塵へと帰す。だが……。

「うっ……っ！」

エリーゼはくぐもった悲鳴を上げ、咄嗟とつさにライーサをその身体で庇い、その場に倒れ込んだ。ライーサの目に、母の身体から散る鮮血が映る。

「お母様っ！」

幸い急所は外れたようで、エリーゼは「大丈夫よ」と、ライーサにささやく。唐突に周囲から、あざ笑うかのような唸りが上がった。さきほど素早く飛びかかり、彼女の身体を牙で裂いた不死となった狼のものだ。それはまるで、勝利を確信したかのような、卑しい優越感に満ちた唸り声だった。

「お母様！ 大丈夫？ お母様！」

ライーサは涙を溜め、きつ、と、その腐り果てた狼を睨み返す。

「よくもお母様をッ！」

ライーサも自分の杖を取り出し、呪文を唱えようとしたその時。エリーゼがライーサの腕を強く引き、それを制止した。

「だめよ、ライーサ」

「お母様……？」

エリーゼは、弱い息の下、ライーサに語りかける。

「だめよ、ライーサ。今のあなたでは……今は、魔術を使つてはだめ。あなたは憎しみに我を忘れている。未熟な力を、強い意志なくして放つても、無駄に力を消耗するだけ。それよりも、逃げ延びるための力を、ひとかけらだけでも温存して。いいわね？」

そして彼女は一瞬だけ瞳を閉じ、次には優しい笑みを浮かべてライーサを見つめた。

「ライーサ」

そのすみれ色の瞳に、涙がいつぱいに湧き上がりはじめる。

「お母様と、お父様のお約束……守つてね。誰も憎まないと。決して復讐のために、あなたの力を使わないと」

彼女はそう言うつてからライーサを引き寄せ、その頬に愛おしそうに口づけを落とす。

（お母様……？）

不意に訪れたある予感と、それがもたらす事態を想像したゆえの恐怖の中で、ライーサの声は言葉にならなかつた。そして、ライーサは、母が右手の人差し指に嵌めた指輪を掲げるのを見た。すぐにその宝石が、淡い紫色の光を灯しはじめ、魂を代償に使用者の魔力を爆発的に高める、魔魂石ダークマテルの指輪が……。

「ライーサ」

エリーゼは、言葉も出せずにいる自分の娘に向かって、今一度振り向く。

「私のライーサ……愛しているわ」

幼いながらも母の最後の決意を悟ったライーサの中で、唐突に激しい感情が沸き起こる。すぐにそれは恐怖の鎖を振り切り、ライーサの喉を突き動かした。

「お母様ッ！」

ライーサがありつたけの声で呼ぶよりも早く、母は指輪を胸の前にかざし、呪文を唱えた。

「エリーゼ、リーゼ……」

ライーサの瞳が、大きく見開かれる。

「テイオラ、ピエリス、グラディオオラス！」

瞬間、残り全ての魂を力に変換したゆえの、激しい光が辺りを包み込んだ。烈風を伴うそれに周囲の不死者たちは一気に消し飛ばされ、光の渦に飲み込まれていく。

やがて、暗い森の中に闇が再び戻ってきた。あたりには静寂だけが満ちている……いや、正確にはたった一つの声だけが、響き続けていた。

「い、いや……お母様、お母様あ……」

倒れ伏し、冷たくなった亡骸に取りすがって、幼い少女が母を呼ぶ声。それは虚ろな森の中に、いつまでもいつまでもこだまし続けていた。

## 第一章

黒という色はとても良い……バストリアの者は大抵そう語る。特に、夜闇の黒

は、全てを包み覆い隠してくれるのだ、と。そしてその濃厚さの中で、ささやかな生業を営む者さえいる。黒というのは、つまり闇の色なのだ。だからここには、闇を好む者が多く住み着く。犯罪を生業にする者から異端の魔術に手を染めた者、異形の宿命を持つ者に、業を背負った者。その因縁や素性は様々だが、光の下では生きづらい者たちが集まって、この国は成り立つ。だからここでは闇の色、すなわち黒が最も良い色とされているのだ。

「確かに身を隠すのには、もってこいの色よね」

バストリアの深い森の中。闇にはとても映える薄桃色の髪をフードで覆い、木陰に身を隠しながら、小さな声でつぶやく者がいた。

その視線の先には幌のついた大きな荷台つきの馬車を止め、焚き火を囲っている数人の男たちがいる。彼らは酒を飲み肉を喰らい、大いに楽しんでいるようでもある。だが猥雑な言葉が飛び交い、下卑た笑いがこだまするその様子は、どう見てもまっとうな集団には見えない。おそらく盗賊、それも武力によって人の財を掠める、野盗の類であろう。

やがて酒瓶を手にした男の一人が、酔っぱらった声で言い散らしはじめる。

「今日の首尾は上々だったなあ！ まさか、あんなとびきりのお宝が手に入るなんてよ！」

その言葉に他の男たちも下品な笑い声を上げ、手にした杯を掲げて乾杯する。

「あれを売れば相当な金になる！ 俺たちは大金持ちだ！」

再び巻き起こる、下卑た笑い声。そんな光景を少し離れた木陰から眺めていたさきほどの人物が、従者らしき小さな影に語りかけた。

「行くわよ、セバスタ」

「承知いたしました、ライーサ様」

次の瞬間。ふつ、と。突如、男たちが囲っていた焚き火の炎が掻き消えた。

彼らは一瞬、急に失われた視界にたじろいだりすが、すぐに立ち上がって周囲を見回しはじめる。

「な、何だ!？」

「か、風もないのに火が消えるとは!? まるで、夕子の悪い魔法みたいだぜ

……！」

「ご名答！」

盗賊が喚いた台詞に、どこからか凜とした声が降ってきた。男たちがその声が見上げた方向を見上げると、「ライーサ、イーサ……」と、おごそかな声で呪文が紡がれるのが同時だった。次の瞬間。

「ディア、ヴァル、アスター！」

と、どこか楽しい声が響く。間髪入れず、荷車の幌の上に光が溢れ、一つの人影が出現する。

「天才魔術師にして稀代の怪盗、ライーサ参上！ 今宵もあなたの夜を盗みま  
す！」

そんな前口上を言い放ち、彼女はマントをひるがえすとともに、フードを脱ぎ去る。たちまち鮮やかな薄桃色の髪が夜風になびき、自信に満ちた少女の顔が現れる。続いて彼女は壇上……荷車の幌の上で、魔法の杖を高々と掲げてみせた。

「ラ、ライーサだと……っ！」

盜賊団たちはその名を聞き、いつせいにたじろぐ。

「くっ……怯むな、相手はたった一人だぞ！」

一団の首領らしき髭の男が苦々しい声でわめくと、腰に携えた刃物を抜き、子分たちに先んじて戦う態勢に入った。

「ですがお頭、ライーサといえ、最近売り出し中の腕利きですぜ」

「だから何だ！ 見てみる、なりはただの小娘じゃねえか！」

「で、でも……噂だと、大の男が数人がかりで捕まえようとしても、簡単にすり抜けちまうとか。何でもいろんな幻術や魔法の技に通じてる天才だって話ですぜ……！」

「そんなもの！」と、頭領がいらだたしげに声を上げようとしたところで、可憐な声が割って入る。

「お褒めにあずかり光栄だわ。そして……お気の毒！」

ライーサは、ひよいと左手のシルクハットを杖で叩くと、再びかの呪文を唱えた

途端に盛大な白煙とともに目もくらむ光が弾け、盗賊たちの視界を奪い去ってしまう。

「ぐ……しまった……！」

しばらく時が過ぎた後、盗賊団の頭領が両目を抑えながら悔しそうな声を上げたが、最早遅かった。まだ白い煙が周囲に霞む中、どんな魔法を使ったのか、彼らが掠めたお宝の山は、馬車とその荷台ごと、忽然と消え去ってしまったのだ。

※※※

「上手くいきましたね、ライーサお嬢様」

セバスタがライーサの横で嬉しそうに身体を揺らしながら言った。ライーサも、少し得意そうに答える。

「今回は簡単だったわね。……あとセバスタ、『お嬢様』って呼ぶの、止めてっ

ていつもお願いしてるでしょ」

「ああ、すみません、つい……。ライーサお嬢……じゃなかった、ライーサ様、今回の荷の中に、一族由来の品はあるでしょうか」

森の中に止めた馬車の積み荷の方を見ながら、セバスタはそう尋ねた。

しかし、ライーサはそれを軽く受け流すかのように「さあね」と返し、御者台の上から飛び降りた。

「そればかりは調べてみないと、ね」

ライーサは馬車の後ろに回り、入口の垂れ幕を捲まくつて、荷台へと乗り込んだ。ライーサの後ろから、ふわふわとセバスタも付いてくる。

すべてを失ったあの日、魔法で再び無意識に生み出してしまったのか、彼だけがいつの間にか、泣きじゃくるライーサの手を引いてくれていた。それ以来、セバスタは忠実な従者としてライーサの側そばにいてくれている。またあの日、ライーサたちの館が燃え落ちると同時に、一族ゆかりの数々の秘宝が盗まれてしまった。それらは多くが力を秘めた魔導器で、ライーサは盗賊稼業かたわらの傍ら、それらを取り

返すべく、各地を飛び回って収集しているのだ。

ライーサは暗い荷台の中を、杖にまとわせた光を使って、そっと見渡す。

かなりの数の盗品が雑多に積まれているようだ。ライーサはとりあえず片っ端から袋や箱を空けて、調べてみることにした。

しかし。

「無いわね……」

「無いですね。今回はハズレでしたかねえ」

セバスタが残念そうにため息を吐く。ライーサも少し肩を落として言った。

「おかしいわね……。あいつら、確かに『とびきりの宝』が手に入ったって言うてたのに」

その言葉通り、盗品とおぼしき荷はたくさんあったが、見たところどれもそう値が張りそうなものではない。一族の秘宝であれば必ず高値がつくし、手に取れば、確実にライーサは特有の魔力の波動を感じることができはずなのだ。

「……あれ？」

「どうなさいました、ライーサ様」

「まだ一つ、積み荷が残ってたみたい」

「えっ」

ライーサの視線の先。そこには、積み重なった箱の後ろに隠れるようにして、大きな布袋が置かれている。

「こんな大きな袋見落とすなんて」

「ライーサ様っ！ 早速開けてみましょう！」

期待にちよつとだけ胸を高鳴らせて、ライーサは袋を縛っていた紐を取り払い、口を開いた。すると……。

その『盗品』を目にして、ライーサとセバスタは目を丸くして立ち尽くしてしまった。

「う、うー……」

袋の中の盗品……いや、見目麗しい少女は、小さくうめくと、ようやく目を覚ました様子だった。手足を縛られ、声が出せないよう猿ぐつわを噛まされている。

おおかた、薬か術かで眠らされていたのだろう。やがて周囲の状況に気が付くが早いか、その目に涙が溢れ始める。

どうやらライーサたちを盗賊の一味と勘違いしているらしく、かなり怯えている様子だ。真つ直ぐな黒髪に綺麗な翡翠色の瞳。細い肩に整った顔立ち。齡はライーサとちよūdと同じくらいだろうか。確かに闇市場の奴隷商人や人買いに売れば、相当な値になるだろう。

(でも、この子どもで……)

ライーサは一瞬記憶の底を探ろうと眉をしかめたが、まずは、と思い至って、手足の縄と猿ぐつわを解いてやることにした。

「だ、大丈夫？」

ライーサは、荷台の隅で身を強ばらせている少女に、若干おずおずと声をかけた。

少女は瞳に涙を溜めて座り込んだままだったが、しばらくして、意を決したように、震え声で問い返してくる。

「あ、あなたも、盗賊の一味なのですか……?」

その声色からは、怯えながらも品位を必死で取り繕ろうとするような、そんな気丈さがうかがえた。

「まあ、盗賊という意味では同じだけどさ」

ライーサの最大の目的は、一族由来の品々を取り戻すこと。ただそのために、善良な市民を傷つけたり、殺めたりすることはない。盗賊と言っても、そこは彼女が誇りにしている部分だ。さらに、昼間は占い師という真つ当な稼業も行っている。とはいえ、たまに悪徳商人や同業の輩から、金品を失敬することもあるにはあるのだが……。

しかしライーサの返答を聞き、少女は、きつ、と涙が溜まった目でライーサをにらんだ。

「わ、わたくしをどうするつもりですか……!」

「ど、どうするって……」

ライーサは肩をすくめて、やや困った時の癖で、薄桃色の髪をひと束、小さく

指でつまんだ。

「別にどうもしないわよ。私を、そこら辺の野蛮な盗賊と一緒にしないでくれるかしら。これでも礼儀はわきまえてるつもりなの。……そう、何なら、あなたのお家まで、送り届けてあげてもいいぐらいにね」

最後の台詞は、ちよつとした冗談のつもりだった。しかし目の前の少女はライーサのその言葉に、飛び上がるようにして反応した。

「ほ、本当ですか!? 嘘ではないでしょうね?」

身体を乗り出すようにして、少女はそう念押ししてくる。

「……それって、あなたを家に送り届けるって話?」

「も、もちろんです!」

「まあ……別にいいけど」

『盗賊』の言葉を信頼するも何もないはずなのだが、と思いつつ、ライーサはや呆れ声あきでそう返す。

すると少女は急に脱力して、強ばらせていた身体をへたり込ませてしまった。

それだけではない。瞳に溜めていた涙が、堰を切ったように溢れ出てくる。

「ちよ、ちよつと……？」

まるで幼子のように泣き始めたその姿に、ライーサは慌ててしまう。とっさに彼女の側に駆け寄り、そつと髪を撫なでてやりながら声をかける。

「ほ、ほら……もう大丈夫よ。大丈夫だから、泣き止みなさい。そ、それはそうとあなた、どこから来たの？」

できるだけ優しい声色で、語りかける。少女は涙を手の甲で拭ぬぐいながら、か細い声で答えた。

「い、イースラ、です……」

「イースラあ？」

その返事に、ライーサは思わず素とんきようつ頓狂な声を上げてしまった。

「イースラって、あの海の向こうのイースラの国？ 何でイースラの子がこんなところにいるのよ。まさか、あんな遠いところからさらわれて来たってわけなの？」

驚きを隠せないライーサがそう言うのと、

「ほ、本当なんです……いろいろ、じ、事情があつて……」

と、少女は顔を手で覆い、また泣き出してしまった。

「ちよ、ちよつとまた……」

ライーサは焦つて、ひとまず少女を落ち着かせようと必死になった。

「分かった、分かったわ。何か深い事情があるのね。そ、そうだ、名前は何て言うの？ 私はライーサ。あなたは？」

ライーサが名乗ると、少女は顔をようやくやく上げ、まだか細い声で名乗った。

「……アンジュ、と申します」

(……アンジュ?)

その名前には、やはり聞き覚えがあつた。

「あ、アンジュって、もしかして……イースラの歌姫として有名な、あの『わだつみの声 アンジュ』？」

ライーサが恐る恐る問うと、少女は、相変わらず目に涙を溜めたまま、小さく

うなず  
頷いた。

かつて、ライーサは一族の秘宝がイースラに渡ったという噂を聞き、船に忍び込んでそこを訪れたことがある。そしてある港町で、イースラいちとされる歌姫、『わだつみの声 アンジュ』の歌声を聞いたことがあったのだ。それは壮絶なほど美しいもので、ライーサも思わず本来の目的を忘れて、聞き惚れてしまったくらいだった。

海辺を横して、水の張られた舞台でその綺麗な歌声を披露し、皆に称賛を浴びて笑っているアンジュの姿。それをライーサは今、はつきりと思い出していた。だが、同時に疑問も湧いてくる。わざわざその舞台に、海辺を横した意匠が施され、水が張られていたその理由……。

『わだつみの声 アンジュ』って、確か人魚の一族じゃなかったかしら？」

だが、目の前の少女には、ちゃんと二本の足がある。ライーサが首をかしげると、少女はびくりと身を震わせ、問いには答えず、黙り込んでしまった。

ライーサが不審そうに眉をひそめると、アンジュと名乗った少女はようやく、

震え声でつぶやくように言った。

「わたくしが悪いのです……」

「え？」

「わたくしがすべて悪いのです！ 一族の選ばれし者として、命に代えてでもあの『秘宝』を守り抜かねばならなかったのに！ それをやすやすと奪われてしまふなどと！」

「ちょ、ちよつと……？」

だが、少女は自分の言葉に興奮してきてしまったようだった。

「い……一族の恥です！ わたくしなど、いつそ盗賊にでも殺められてしまえばよかったです！」

「と、とにかく落ち着きなさい。深い事情があるのは分かったわ。よければ、私に話を聞かせてくれないかしら」

その言葉に、今まで沈黙を守っていたセバスタが反応する。彼はそつと彼女の傍に寄って、小声で訴えた。

「ラ、ライーサ様……！ お優しいのは結構ですが、わざわざ自ら面倒事に巻き込まれなくとも……！ 私には分かるのです、これは厄介事の匂いがいたしますよ？ しかも相手はイー斯拉の者。異国の者を助ける義理はありませんでしょうに……」

セバスタはあわあわと言ひ募る。だが「わーかつてるわよ！」と、ライーサはいらだたしげにその言葉を遮った。

「だって、放っておけないでしょう。話を聞くだけよ、聞くだけ！」

自棄になったようなライーサに、セバスタは唇を尖らせて、なおも言い募ろうとした。だがその時。

「わ、わたくしの話を、聞いてくださるのですかっ！」

少女は耳ざとくその言葉を聞きつけ、目を輝かせて、ライーサを見つめてきた。  
(う……)

ちようど荷馬車の板の隙間から月明かりが差しして、少女の白い肌を銀色に染め上げていた。こうして見ると、確かにその少女——アンジュは、同性のライーサ

も思わずどきりとしたほど、美しかった。そしてこの綺麗な少女が、今、自分を頼り切った瞳で見つめている——たちまちライーサは、セバスタの心配そうな顔をよそに、自信たっぷりな表情を作ってこう言い放ってしまったのだ。

「もちろん！ この天才魔術師ライーサに、話を聞かせてもらんなさい！」

※※※

しばらくして、アンジュはまだうつむきがちに語り始めた。

彼女が言うには、誰をも魅了する『わだつみの声』とは、持って生まれた資質のほか、アンジュの一族に代々引き継がれる神秘的な力の恩恵でもあるらしい。だがその力には、ある『秘宝』が密接に関係している。そして、その秘宝と力を継ぐ者は、代々厳しい儀式によって選び出されてきたというのだ。『秘宝』の持ち主として選ばれるのは、一族でただ一人だけ。だからアンジュが、たくさんの兄妹の中からその持ち主に選ばれた時、彼女自身が大いに驚いたという。

そして『秘宝』は、金の装飾が施された首飾りとなって、アンジュの首に掛けられることとなったらしい。

——だが、去る一ヶ月前。波風の荒れる夜、それが黒い霧に紛れて潜入してきた賊の手によって、盗み出されてしまったというのだ。その手口から、すぐにバストリアの者だということは分かったというのだが……。

「……で、一族の恥をすすごうと、みんなに黙ってそれを探しに来た挙句、見事に盗賊に捕まって売られそうになってたってわけ？」

一部始終を聞いたライーサが呆れた声とともに、ため息を吐いた。

「はい……」

アンジュは小さくつぶやいた。

「ちなみにこの足は、名うての霊薬師でマキナという方にいただいた魔法薬で作られた、仮りそめのものなのですが……」

土地勘もなく知り合いもない身なので、足があれば探索行も楽だと考えたのだろうが……無茶もいいところだ。ライーサは再び深く深くため息について言っ

た。

「馬鹿ね。あなた一人でこの魔王国……バストリアに来たって、どうにかなるものでもないでしょうに」

ライーサの声に、「でも」と、アンジュは弱々しく見返した。

「元はわたくしの甘さが招いたこと。落胆のあまりマジュラの大長も床に伏せてしまい、このままではいられませんでした。わたくしはどうあっても、『秘宝』を取り返さねばならないのです……!」

言い終えるとアンジュは唇を噛み、ぎゅっと両手を握りしめた。その指は、服の裾を強く掴んでいる。

「うーん……事情は分かったけれど、誰にも告げずに来たなんて、ちょっと考えが足りなさ過ぎない？ 家族はみんな、大騒ぎしてると思うんだけど？」

ライーサの言葉に、アンジュは今度は慚然とした声を発した。

「わたくしの家族の心配といえば、いつも『秘宝』のことばかり……わたくし自身のことなど、これっぽっちも案じているはずがありません！ だって、あの入

たちが大事なものは、わたくしの声……一族に栄光と富をもたらさず、『わだつみの声』だけなのですもの……!」

その強い言葉に、ライーサはかつてイースラの港町で見た、アンジュの笑顔のことを再び思い出す。歌声を披露した後、舞台を包む拍手喝采の中で見せた笑顔……それは美しくはあったが、どこか人形のように、作り物めいた印象でもあった。

(きつとこの子も、それなりに苦労してきたんだろうな……)

ライーサはアンジュの顔を覗き込んで、優しく語りかけた。

「でもね、やっぱりあなたの家族が、あなたを気にかけていないなんてこと、ないわよ。だって、やっぱり血が繋がっているんだもの。だからほら、やっぱり今は、おとなしくイースラに帰りま……!」

「いいえ、いいえッ!」

アンジュが突然激しくかぶりを振ったので、ライーサは驚いて目を丸くしてしまった。

「ライーサ様ッ！」

続いてアンジュは、さっと顔を上げると、再び大声を上げる。

「はい？」

そのあまりの勢いに、ライーサは思わず間の抜けた声で返してしまった。アンジュは間髪入れず、姿勢をただちに正すと、両手指を荷車の床に揃え、上半身を折りたたむようにして頭を下げた。

「あなたをバストリアーの『天才魔術師』とお見受けしまして、折り入ってお頼み申し上げます……！」

早くもこの後の展開を見越したセバスタが、あわあわとしている中、アンジュは切実な声で言い切った。

「どうか、我が一族の『わだつみの声』……それを司る『わだつみの秘宝』を、取り返していただけませんかでしょうか！」

セバスタが身振り手振りで、必死に「断れ」というサインを送ってくる。ライーサは彼の方をちらりとうかがうと、深く息を吐いて、なるべく冷静に返した。

「申し訳ないけれど……それはできないわ」

その返答に、アンジュはすぐさまライーサを見つめ、「なぜですかっ！」と、悲痛な声を上げた。

「なぜって……私はバストリアの者だもの。しかも秘宝を盗んだのは、黒霧に紛れた手口からして、きつと同じバストリアの人間だって言ったわよね。これでも私、闇の世界の住人だから。盗賊と魔術師の世界、両方に世間体というものがあるのよ。だから、イースラの人間に肩入れするわけにはいかない」

アンジュはたちまち、失意でいっぱいの表情を浮かべる。ライーサの胸が少し痛んだが、こればかりはどうしようもない。

「イースラに向かう船が出る港までは、送り届けてあげる。でも、それ以上のことはできない」

ライーサはきつぱりと言い切つて、そつと小さな肩に手を置き、アンジュの上半身を起こさせた。もうこれ以上、話すことはないだろう。隣でセバスタが、ほつと胸を撫で下ろしているのが分かる。

しかし今度はライーサの足に、アンジュがしがみついてきた。まるで溺れる者が、そばに垂れている一本の糸を逃がすまいとでもするかのように。

「ちよ、ちよつと……」

ライーサが戸惑いの声を上げるのを打ち消すかのように、アンジュは必死さの滲んだ声を上げる。

「ラ、ライーサ様！ ライーサ様、そこをどうか、お願いいたします！ わたくしにはもう、頼れる方はあなたしかいないのです！ ほ、報酬……、報酬ならあとで、いくらでもお支払いいたします！ だからどうか！ どうかお願いします！」

「えっ……で、でも……」

ライーサは足にしがみつくな細い両腕を振りほどくこともできず、困り切った顔になった。

「お、お金とかの問題じゃ……」

だが、アンジュが手を離す気配はない。仕方なく、ライーサは素早く杖を取り出して、呪文を唱える。

「ライーサ、イーサ……ディア、ヴァル、アスター！」

同時に弾けた白い煙と光の中、アンジュが咳込み、目を覆いながら手を離す。まさに一瞬の早業で、アンジュが気づいた時にはもう、ライーサはさきほどの場所と少し離れた、宝箱の上に腰掛けていた。

「どうしても、聞き入れてくださいませんか……？」

へたり込んだまま、なおもすがるように言うアンジュに、ライーサは「ごめんね」とだけ、短く言った。それを聞き、アンジュはようやく大人しくなる。冷や汗をかいていたセバスタが、再びほっと胸を撫で下ろす様子を見せた。

「さあ、そろそろ出発しましょ。ここからなら、数日で手近な港に……」

「ど、どうしても聞き入れてくださらないのでしたら……」

「え？」

まだあきらめていなかっただらしい、アンジュの思いつめたような声。嫌な予感が、ライーサの脳裏を掠<sup>かす</sup>める。

「もう、わたくしは自害するしかありませんっ！ ライーサ様、お助けしていた

「だいたご恩は、後生でも忘れませんのでっ！」

アンジュは突然そう叫ぶと、懐から何か細長い物を手早く取り出す。続いて、それ……脇差の鞘をさつと抜き取ると、彼女は自らの喉元へ、鋭く光る切っ先を向けた。

「わ、わーっ！」

ライーサは慌てて杖を振りかざした。

「ライーサ、イーサ、ディア、ヴァル、アスター！」

——ポンツ

と軽快な音が響き、荷車の中が白煙で包まれる。それが晴れると、すでに脇差しはライーサの手の内にあった。

「ちよつと！　び、びつくりさせないでよ！　こんなモノ隠し持ってたなんて！　あなた何考えてるの!？」

ライーサが怒鳴ると、アンジュは目に涙を溜めて「だって、だって」と子供のようにつぶやき、その場に崩れ落ちてしまった。

脇差しをぼんとセバスタのところに放り、あのねえ、とライーサが説教の一つも始めようとした直後……。

「致し方ありません……」

と、またはや不穏な言葉がアンジュの唇から漏れた。

「こうなったら、一族秘伝のこの毒薬で……!!」

アンジュが今度は、たもとから取り出した小瓶の蓋をきゅつと空けようとする。

「きゃーっ!」

動揺したライーサの叫び声と、あの呪文が再び荷馬車の中に響き渡った。

次の瞬間、ライーサは術で奪い取った毒薬の瓶を、今度は荷馬車の外に勢いよく放り捨てると、大声で叫んだ。

「だから止めなさいって言ってるでしょ! あなた、そんな若い身でわざわざ死を選ぶなんてどういう……あつ」

アンジュがまたぶつぶつと言い始めている。

「こうなったら……舌を噛み切って死ぬしか……」

「ちよっ……！」

物品ならともかく、本人の舌ではどうあつても奪い取れない。ライーサはついに弱り切つて、たまらず叫んでしまった。

「わ、分かった！ 分かったわ！ 『秘宝』を取り戻すの、手伝つてあげる！  
だから、もう止めなさいっ！」

その言葉に、アンジュの動きがぴたりと止まる。そしてその瞳が一気に輝き始めた。それを見て、ライーサは、はつとなり、次には「しまった……」という表情を浮かべ、苦<sup>にが</sup>り切つた顔になる。隣のセバスタなどはぼかんと大口を開け、もう声も出ない様子だ。

「あ……ありがとうございますっ！ ライーサ様！」

げんなりするライーサと正反対に、アンジュは希望に満ち溢れた声で、喜色満面である。もう、前言撤回などとはとても言えない雰囲気だ。ライーサは荷馬車の壁に手を付くと、頭を抱えてくずおれてしまった。

## 第二章

「さ、入って」

ライーサは扉を開けて、アンジュを部屋へと招き入れた。この場所は、バストリアの中心街からそう離れていない郊外。ここには多くのバストリアの住民が住み着き、ねぐらとしている。しかし住宅街と言っても、金持ちや大商人たちが住んでいるような立派なものではない。布で仕切った壁は当たり前、土や石を積み上げて粗いままの壁や屋根はざら。床板代わりに、地面にそのまま布や絨毯を敷いている住居がほとんどという、つまり貧民街だ。

ライーサの住処も、漏れなく土壁でできた、貧相な場所だった。狭い倉庫を利用して造られた不便極まりないところだったが、いくつかの部屋に分かれて扉が付いているのと、近くに偶然にも水路が通っており、シャワーなどの設備を整えることができたのがささやかな自慢だ。粗末ながらもテーブルや家具はそろっており、台所もある。この街の中では比較的上等と言って良いだろう。部屋の中へ

と促されたアンジュは、恐る恐る足を踏み入れる。

「お邪魔します……」

「適当に座つて。今お茶でも淹れるわ」

アンジュは言われた通り、小さなテーブルの前にちよこんと座つて、ライーサがお茶を淹れるのを待った。備え付けの台所で適当に湯を沸かし、二人分の茶葉をカップに淹れるライーサの横で、セバスタが小声で捲くし立てた。

「ラ、ライーサ様っ！ あの子をこんな隠れ家まで連れて来て、どうなさるおつもりですかっ！ もし、さっきの話は全部嘘で、正体がイースラの密偵だったりしたら……さあ、今すぐ追い出してしまえば……！」

「だからそんなこと、できるわけじゃないでしょう」

焦るセバスタに、ライーサはお茶を淹れる手を止めることもせず返す。

「だって、さっきの盗賊団の宝は全部貧民街の人たちに配っちゃたし、他の部屋を借りるお金もないじゃない」

「で、ですが……っ」

なおも言い募ろうとするセバスタに、お茶をカップに注ぎ終わったライーサはちらりと視線をよこす。

「心配性ね、セバスタは。大丈夫よ、さっきの話が嘘であの子がイスラの手の者だったとしても……私には失うものなんてないじゃない」

ライーサはそう言っ、どこか寂しげにセバスタに笑いかける。セバスタは急に何も言えなくなってしまう、悲しそうに口をつぐんだ。

ライーサは静かになつてしまったセバスタの背をぼんぼんと優しく叩いてから、銀色の盆に紅茶の入ったカップを二つ載せる。そして、何事もなかったかのような顔で、アンジュの元へと向かった。

「そんなに良いお茶じゃないから、味は保証しないわよ。でもまあ、ないよりましでしょ」

テーブルにカップを置いてから、ライーサは自らも腰を下ろす。

アンジュはカップをまじまじと見つめてから、緊張した面持ちで言った。

「ありがとうございます。その……いただきます！」

強ばった声と表情。今になって、自分の言動が軽率だったとも思い始めたのかも知れない。そう感じたライーサは、できるだけ優しく声をかける。

「そんなに恐がらなくても良いわよ。さつきも言っただけど、私はそこら辺の野蛮な盗賊とは違うの。油断させた後で……なんてつもりもないから、安心して」

しかし、やはりアンジュは緊張したような面持ちを崩さず「は、はい……」と、小さな声で返したただけだった。せっかく淹れた紅茶に、手を付ける気配もない。

ライーサが仕方なく自分のカップを手を取ったところで、唐突にアンジュが謝罪らしき言葉を口にする。

「す、すみません、ライーサ様」

「何が？」

ライーサが首をかしげると、アンジュは続けた。

「こ、こんなことに巻き込んでしまって……」

身体を小さくしてそんなことを言い出したアンジュに、ライーサは思わず口を含まない紅茶を吹き出しそうになってしまった。

何を今さら……とライーサは思い、わざと呆れ声でアンジュへ返した。

「そう思っているなら、今からイースラへ帰ってもらってもいいのよ？」  
途端にアンジュは慌てふためいて、

「そ、それは困りますっ！」と、ライーサにすがりつかんばかりの様子で、涙目になって訴えてきた。

ライーサは「冗談よ」と軽く笑ったあと、小さくため息をついてから言った。

「だったら、そんなこと気にしてないで、あなたも少しでも、『秘宝』を取り戻す手段について考えてみて」

ライーサが言うと、「はい……」と、また消え入りそうな声で、アンジュは返事をする。ライーサはそんな彼女を気遣うように、優しく声をかけてやった。

「ほら、元気を出して。さ、せっかく淹れたお茶、冷めちゃうわよ？」

するとアンジュは少し焦ったような表情を浮かべ、その後、おずおずと切り出した。

「その……、わたくし、まだ地上での生活に慣れていないものでして……こ、こ

のお茶というものは、どのようにしていただければよいのでしょうか……」

「どのような……」

作法でも気にしているのだろうか？ 自分と同様、ただ口を付けて飲むだけでいいと思うのだが、とライーサは首をかしげる。そんな気持ちが伝わったのか、アンジュはライーサを見ながら、見よう見まねという風にカップを手に取った……、が、次の瞬間。

「あ……熱いっ！」

カップがテーブルに落ち、液体のこぼれる盛大な音とともに、ライーサの表情が慥然としたものになる。アンジュがひっくり返してしまったカップの中身は、すべてライーサの頭に注がれてしまうことになってしまったのだ。

「ごっこ、ごめんさいっ！」

青い顔をして謝るアンジュに、ライーサは少々引きつった笑顔で返した。

「ま、まあいいわよ……」

恐縮しきった様子アンジュを横目に、ふとライーサは疑問を感じる。どうや

らアンジュが、お茶の熱さに驚いてしまったのは確実な事実らしい。しかし、自分の頭にかかったお茶はそこまで熱くなかったのだが……？　そこまで考え、すぐに彼女はその理由に思い当たる。そういえば、人魚は人間よりも熱さに弱いのだという話を、どこかで聞いたことがあった。

（いろいろと、気をつけなくちゃいけないわね）

そんなことを考えながら、ふと珍しいペットでも飼おうとしているかのような心境になっている自分に、ライーサは気づく。アンジュはといえば、セバスタが慌てて持ってきたナプキンで、ライーサが髪と身体をぬぐっている間にも、アンジュはわたわたと慌てふためいているばかりである。最早涙目になって、焦りの表情を浮かべているアンジュの姿。それを見ているうち、ふと。

「……ふ、」

小さな声が、ライーサの唇から漏れた。ひたすら謝罪の言葉を繰り返していたアンジュが、それに気づいて首をかしげる。だが、こみ上げてくる笑いを止めることは、もうできなかった。

「ふふふつ、あは、あはははっ」

唐突に飛び出したライーサの笑い声に、アンジュは目を丸くする。

「ご、ごめんね、そんなに焦らなくても大丈夫なのについて思っただって、私たちにはあの程度の熱さ、全然気にならないんだもの。あはは、あなたって意外と、面白いわね！」

ライーサはついに腹を抱えて笑い出す。一時ぼかんとしていたアンジュも、釣られたように笑顔を浮かべて……。そして「ごめんなさい」と一言また謝った後、彼女はやつと初めての微笑をライーサに向けたのだった。

※※※

窓から朝陽が差し込む。ライーサはその光に刺激され、ベッドの上で若干の眠気を残しながらも目を覚ました。目の前には、黒髪の少女の寝顔。ライーサは一瞬見慣れぬその少女の顔に目を丸くしたが、昨晚のことをすぐに思い出し、胸を

落ち着かせた。ライーサの部屋にはベッドが一つしかないから、昨晚、一緒に眠りについたのだ。普段なら、ライーサはいつもセバスタを抱きしめて眠っているのだが、今回ばかりはベッドが狭かったし、この歳になって丸々としたセバスタを抱きしめて眠っているなどということは、アンジュには知られたくなかったのだ。

昨晚、「今夜はシルクハットの中で眠って」と言った時の、セバスタのショックを受けた顔が忘れられない。ライーサは思わず吹き出してしまったが、今にして思えば、ちよつぴりかわいそうだったかもしれない。

アンジュは目と鼻の先で、まだ寝息を立てて穏やかに眠っている。ライーサはその顔にかかる黒髪を、人差し指でさらりと払ってやったが、起きる気配はない。かなり疲れているのだろう。もう少し眠らせてやっても良いかもしれない。ライーサはそう思ってそつと身を起こし、ベッドから静かに床に下りた。だと言うのに、すぐさま。

「あつ、ライーサ様！ おはようございますっ！ もうこのセバスタ、昨晚は寂

しくて寂しくて思わず泣きはらしてしまい……」

と言うわりには元気いっぱいな様子で、壁にかかっていたシルクハットの中から、ひよいとセバスタが顔をのぞかせる。ライーサは急いでシルクハットの中に手を突っ込み、そのはしゃいだ大声を止めさせた。

「ライーサ様、ひどい……」と、シルクハットの中からすすり泣く声が聞こえてきた。ちくりと胸が痛んだが、脳天気なセバスタが悪いのだ、とライーサは無理やり良心の呵責かじやくを押さえつける。

やがて、しばらくした後、アンジュが目を擦りこすながらその身を起こした。

「あら、おはよう。思ったより早かったわね。もう少して朝食ができるから」

ライーサは台所に立ちながら、アンジュにまるで母親のように声をかけたが、アンジュは依然ほんやりとして、むにゃむにゃと口の中で何かをつぶやいている。ちよつと寝ぼけている様子だ。

そんなアンジュの姿が何だかおかしくて、ライーサはつい、くすくすと笑ってしまう。

「朝ごはんができちゃうから、先に顔を洗ってきなさい。そうすれば、目も覚めるわよ。セバスタ、洗面台のところまで連れてってあげて」

わざわざ朝食まで用意なさるなんて、ライーサ様はまったく……、と、ぶつくさ言いながらも、セバスタは寝ぼけ眼のアンジュまなこの前にふわふわと浮き、彼女を洗面台のところまで連れて行く。

ややあつてばしゃばしゃと水の音がして、それが止んだかと思うと次はいきなり、

——バターンッ！

と、扉が勢い良く開かれた。部屋中に響き渡ったその音にライーサはびっくりして、危うく朝食の皿を落としてしまうところだった。

扉の方を見ると、肩で息をしたアンジュが、顔を真っ赤にし、髪を振り乱して立っていた。

その様子にライーサが固まっていると、アンジュは声を詰まらせながら、「す、す、すみま、すみません……」と、息も絶え絶えにいつもの謝罪の台詞を口にし

た。

「すみません、わたくしつたら、こんな時間まで寝坊をしてしまつて……、せめて朝食のお手伝い程度は、させていただけようと思つておりましたのに……っ」

アンジュはひどく慌てた様子で言うが、ライーサは「ああ、何だそんなこと」と苦笑し、手を動かしつつ答える。

「朝食なんて、何てことないわよ。それにこんな時間つて、まだ朝にしては早いわよ？ あなたいつも何時に起きてるの？ 『わだつみの声 アンジュ』も、大変なのね」

少し笑いながら、ライーサは続いて朝食の皿をテーブルに並べていく。その言葉が意外だったのか、黒い髪を跳ねさせたまま、アンジュは目を瞬かせてその場に立ち尽くす。

そんなアンジュに、ライーサは着ていたエプロンを脱ぎつつ言う。

「ほら、そんなところに立つてないで。朝食を食べましょ。『秘宝』を探すなら、朝はきちんと食べないとたないわよ」

ライーサの言葉に、アンジュはおずおずとテーブルの前に座り込んだ。しかし遠慮がちだったその表情は、テーブルの上の料理を前に、一気に輝きを取り戻す。

「わあっ！ 美味しそう！」

そこには色とりどりの食材を使った朝食が並べられていた。どれもライーサが朝から頭をひねりつつこしらえたものばかりだ。今は人間の姿をしているが、元は人魚族なのだから魚や貝類は口にできないかもしれない。だからと言って、穀物のパンだけでは質素過ぎる。アンジュはいわば由緒ある家のお嬢様、何といってもイースラの名高い歌『姫』なのだから……。そんな風にいろいろと思いつぐらせた挙句、ライーサはそう豊富でもない食材の棚やら箱やらをひっくり返し、アンジュが口にできそうな食材だけを使って、いつもよりうんと豪華な朝食を作り上げたのだった。

「このバストリアは不毛の地だから、特産品なんてものは少ないけれど……でもそのウール豆のスープは、昔からの伝統料理よ。今度は温度も少し調整しておいたから、熱くはないと思うわ」

他にも苦勞して採した一番新鮮な野菜を使ったサラダを中心に、ライ麦のサンドイッチ、ちよつとした贅沢品であるリンゴをすりおろしたジュース、それに運良くイースラ産の海藻の和え物<sup>あ</sup>があつたので、テーブルに並べてみた。アンジユの目が、それらを前にしてきらきらと輝き出す。

「これっ、わたくし、いただいて良いのですかっ？」

待ちきれないと言つた様子で聞くアンジユに、ライーサは「もちろん」と軽く返す。するとアンジユは背筋を伸ばして椅子に座り直すと、丁寧に両手を合わせてイースラ流に一礼をした。その品のある所作に、ライーサは思わず感心してしまつた。だが次の瞬間には、その顔にめいっばいの笑顔を浮かべ、アンジユが「いただきますっ！」と元気良く朝食に手を伸ばしたので、ライーサは若干拍子抜けしてしまつた。

サンドイッチやジュースの味わい方を尋ねつつも、次々とアンジユは皿を平らげていく。

「美味しいですっ」

とそのたびごとに感動を込め、嬉しそうにアンジュが言うので、ライーサも自然と笑顔になってしまう。

（——こんな風に）

釣られて顔をほころばせながら、ライーサはふと思う。こんな風に。

「……こんな風に、誰かと朝食を摂るなんて久しぶりだわ」

小さくあつ、とつぶやいてライーサは口を押えたが、アンジュは何も気づかなかった様子だった。サラダを慣れないフォークで一生懸命口に運ぶ手を止め、彼女は「何か仰おっしゃいましたか？」

と、首をかしげる。

何でもないとライーサは慌てて返し、グラスからすりおろしたリンゴの果汁を口に含んでごまかした。思えば、あの日からずっと、ライーサの食事は、常に一人だった。セバスタは食物を摂とらないので、いつもテーブルの上の食事は一人分だけ。幼い頃、館で父や母たちと口にしていた料理は、いつだってどんな物だって美味しかったのに。でも今は。アンジュが、にこにこしながらテーブルの向

こうで料理を口に行っている。

「ライーサ様……いいえ、ライーサはお料理が上手なのですわ」

昨晚ベッドと一緒にいる時、ライーサが『様』付けを止めるように、と言っておいたのをきちんと守りながら、アンジュは話しかけてくる。

「この海藻……『カカク』は、イースラでは栄養豊富な食材として重宝されているのですよ」

アンジュは言つて、『カカク』を口にして、さらにライーサへと笑いかけた。

「それにしても地上では、いつもパンが食べられて良いですね。海の中ではなかなか日常的には……」

ライーサはアンジュの話に付き合い、時には相槌を打ち説明を添えながら、自らも食事を口に運ぶ。

「これは見たことがない食材です……。この花びらのような野菜は、何という名ですか？」

「それは……」

ライーサはもう何度目かのアンジュの質問に答えようとして、ふいに声が詰まるのを感じた。

——久しぶりに。

食べ物か。

……食事が。

「……ライーサ？」

興味津々だったサラダの皿から顔を上げ、アンジュがライーサの表情をのぞきこんだ途端。アンジュは驚きで目を瞬かせた。それは、ライーサ自身にすら説明できない感情だった。柔らかい食事の舌触りと、どこか温かく新鮮な味わいととも、胸の奥から湧き上がってきた気持ち。

——……美味しい。

ライーサの頬に、いつの間にかぼろぼろとかすかな熱を持った雫が伝っていた。「ラ、ライーサ！ どうしたのですかっ！ どこか痛いのですかっ！ そ、それともわ、わたくしが何か気に障るさわことでも……っ」

途端にアンジュは慌てふためく。セバスタも焦った様子でライーサのそばにやってきた。ライーサは一呼吸遅れて頬を伝わる温かいものの正体に気づき、自分でも驚いたように、急いで手の甲でそれを拭<sup>ぬぐ</sup>った。それでもまだ、涙は湧き上がってくる。たまらず、ライーサは二人から目をそらす。

「な……何でもないわ。ちよつと、その、目に果物の汁が跳ねちゃっただけ……。か、顔、洗ってくるわね」

ライーサはそう言い残し、逃げるように洗面台の方へと席を立つ。セバスタが慌てたようにその後を追い、色とりどりの朝食が並べられたテーブルには、気懸<sup>きが</sup>かりそうな表情のアンジュだけが残された。

洗面器に湛えられた冷たい水を、ライーサは両手で顔に勢いよく浴びせかけた。きん、と凍てついた水の感触に、熱を持った目頭がそつと冷やされていく。

「ライーサ様……」

洗面器から顔を上げたライーサに、後ろからセバスタが心配そうに声をかけて

きた。

「ごめんね、セバスタ。びつくりさせちゃって。おかしいわね、泣いちゃうなんて」

タオルに顔を埋めたまま、ライーサは小さく言葉を漏らした。

「……何だか、私」

ライーサは一層タオルに顔を埋めて、まるで自分に言い聞かせるようにその言葉の口にした。

「……ちよつと、寂しかったみたい」

やや間があつて、まだあどけなさの残るほっそりした肩が、小さく震え出した。セバスタはそれをじつと見守つて、頃合いを見計らつてから、その薄桃色の髪へと、いつかのように短い手をそつと伸ばした。

※※※

朝食の食器を片付けてから、ライーサは「さて」と、腰に手を当てて、テーブルの前に再び立った。

「腹ごしらえは終わったわね。早速『秘宝』を盗んだ犯人を探し当てるわよ」

「はい。でも、一体どうするのですか？」

若干不安そうに尋ねてくるアンジュに、ライーサは、ふふん、と、得意そうに鼻を鳴らす。続いてセバスタに命じ、壁にかかっていたシルクハットを持ってこさせた。それを、逆さまにしてテーブルの上に置く。

「まあ、見てなさい」

ライーサはアンジュにもつたいを付けてから、ウインクして見せた。

ライーサは愛用の杖を取り出し、先端を光らせる。そしてシルクハットの上でくるりと回してから、呪文を唱えた。

「ライーサ、イーサ、ディア、ヴァル、アスター！ さあ、『わだつみの秘宝』を盗んだ犯人を！」

ライーサが声高に唱えると、シルクハットの中に光が集まり出し、それが最高

潮に達したところで、ライーサはその中に手を突っ込むと、小さな青い水晶玉を取り出した。

「わあ！ ライーサはこんなこともできるんですね！」

アンジュが感心したように言うと、ライーサは再び呪文を唱え、その水晶玉に向けて杖を振りかざす。その鏡のような表面は、興味深そうにそれを覗き込むアンジュと少し得意げなライーサの顔を写すと、一度きらりと輝きを放った。その後、その表面はぼんやりとかすみ、次第にとある風景を形作り始める。

再び驚きの声を上げるアンジュ。そんな彼女に、今度はセバスタが得意そうに説明する。

「ライーサ様は魔術の腕前だけでなく、占いの方も得意なのです。昼間はあちこちの街中で、占い師としても活躍していらっしやるのですよ」

「まあ」と、さらにアンジュは感心する。一方ライーサは「余計な事言わなくて良いの」と、胸を張るセバスタの尻尾をぐいと引っ張った。

「そんな事より」

ライーサは強引に話を戻して、水晶玉の表面を覗き込んだ。そこに映っていたのは……一人のオークの姿だった。

緑色の肌に、まるで悪鬼の様な凶相。蜘蛛を思わせるひよる長い手足に、鋭い爪が伸びた指。貧相な身体は筋張り、赤茶けたつぎはぎだらけの粗末な衣服を身にまとっている。ぼうぼうに伸びた頭髮は頭のとっぺんで乱雑に縛られ、ぼろぼろの箒ほうきのように飛び出た髪うつきの先端が、その異相に拍車をかけている。そのオークは、古戦場とおぼしき鬱蒼うっそうとした森の奥で、土の下から掘り返した白骨を引きずり出していた。

「……『グッコ』だわ」

嫌悪感の混じったライーサの声に、「グッコ？」とアンジュは首をかしげて、不思議そうにその奇妙な言葉の響きをなぞる。

「そうよ。『タグの屍術師 グッコ』。タグ荒野のオークたちの中でも一番嫌な奴の一人。屍を勝手に『屍術』で配下にして、それを戦場で戦わせて報酬を荒稼ぎしてるゲスな奴よ。正直、あまり関わり合いになりたくない種類の手合いね」

「そのような方が……」

アンジュは口元に手を当て、驚いた表情をする。屍術や死霊術に加え、それを使う者たち自体が、イースラではあまりなじみのない存在なのだろう。

「確かに、こいつなら『秘宝』も盗みかねないわね……」

ライーサは鏡に映されたグッコの姿を見ながら、思案顔でつぶやく。グッコの卑劣な性格と、報酬次第でどんなことでもやる下劣さは、バストリアの国中に知れ渡っている。グッコ自身が、私利私欲で『秘宝』を盗み出したのかもしれないし、誰かに雇われてそれを狙ったのかもしれない。しかしどちらにせよ、彼が事件に関わっていることは疑いがないだろう。

「私の占い、こう見えても的中率は高いの。『秘宝』を盗み出した犯人は、グッコでまず間違いないと思う」

ライーサはきつぱり言い切り、杖を振りかざしてシルクハットの中へと水晶玉を戻した。

「その、グッコさんとは、どのようにしてお会いできますか」

アンジュは不安げにライーサに問う。その言い方からして、まるで話し合いで『秘宝』を返してもらおうとでも思っているようだ。

「グッコ『さん』だなんて呼び方、しなくていいわ。言っておくけど、きっと穏便な話し合いじゃ収まらないから。きっと『わだつみの秘宝』は、普通のやり方じゃ返してもらえないわよ」

それ相応……、否、その正当な代価以上の金銭が用意できるのなら、グッコとも取引ができないわけではないだろう。だが身一つでバストリアに来たアンジュはもちろん、ライーサにも、貪欲な彼が望むような対価を用意することは難しいだろう。

「では、どのように……」

ライーサの言葉にさらに不安そうな顔になって、アンジュは再び尋ねる。

「そうね、だから、もしも話しても無駄そうなら」

ライーサは強い決意を込めて口を開く。

「奪われたものは、奪い返すしかないでしょうね」

ここはバストリア。力と魔の掟がすべてを支配する地なのだ。

※※※

バストリアの地について夜の帳とぼりが降りた。活気づいていた街にも人っ子一人いなくなり、静けさだけが辺りを包む。街外れの森の奥にある、古い墓地。木々の隙間から呻き声のような風音が鳴り、頭上からは気味の悪い夜鳥の声が、しきりに聞こえてくる。

奥深いその森に、ざり……、ざり……、と、固い土を削る音が怪しく響く。

角灯かんとらの仄ほかな明かりの下。土を削っていたその者は、やがて土中から何かを見つけたようで、小さな牙の生えた口元をにんまりと歪ませた。彼が土の中から掴み、ずるりと引き摺り出したのは、肉も腐りきって骨が見えた屍しかばねだ。

「あ、あれがグッコさ……、グッコという方ですか？」

月明かりの下、茂みに身を隠しながら、屍を掘り返すのに夢中になっている怪

しい影……グッコの方をうかがいながら、アンジュが小声で隣のライーサに問うた。

「そうよ。あれが『タグの屍術師 グッコ』。相変わらず嫌な趣味をしてるわ」  
ライーサは眉根を寄せ、顔をしかめながら答える。

「あなたはここで隠れていなさい」

ライーサはアンジュに念を押す。本来ならばこの場にも連れて来たくなかったのだが、ライーサは見た目は青い宝玉だという『わだつみの秘宝』とやらを、きちんと見たことがない。なので、グッコに偽物を掴つかまされないために、やむを得ずアンジュを連れて来たのだった。

ひとまずそんなライーサの言葉に、アンジュは素直にうなづいた。申し訳なさいの滲しみみ出ている顔だったが、自分が前に出ても無力だと、身の程をわきまえたのだらう。

「護身用の魔術具だけ渡しておくわね。万が一何かあったら、これで逃げなさい」  
ライーサはアンジュに黒魔術の護符を手渡す。アンジュはどこか不安そうにそ

れを受け取り、ぎゅっと胸の前で抱くように握りしめた。

「お気をつけて……」

アンジュはライーサを見つめてそう口にした。ライーサはふと、その言葉と表情をどこかですでに知っているような気がした……。だが、凶暴かつ残忍な相手と対峙しようとしている緊張感が、すぐにその疑問を打ち消してしまった。

そして。次の屍を見つけて悦に入っていたグッコの後ろから、夜闇の中にも良く通る声が響いた。

「死者の眠りを妨げた挙句、勝手に自分の道具にするなんて、まったく卑しさもここに極まれり、ね」

グッコが驚いて振り返ると、そこにはフードを目深にかぶり、まるで奇術師のような格好に身を包んだ人影が立っている。

「お、お前は……っ!？」

グッコがその言葉を口にするより早く、その人物が手にした杖の先から、目もくらむ光と白煙がほとばしって周囲を包んだ。一瞬目をそむけたグッコが気づく

と、そこには月明かりの下にも良く映える、薄桃色の髪がたな引いている。

「天才魔術師にして稀代の怪盗、ライーサ参上！ 今宵もあなたの夜を盗みます！」

毎度の前口上を言い放ち、ライーサは腰に手を当ててグッコの前に立ちほだかつた。

いきなりの邪魔者の登場に、グッコはわずらわしそうな表情を浮かべた。

「ちつ、最近売り出し中の怪盗のお嬢ちゃんか……で、何の用だ」

しわがれた声とともにようやく我に返ったグッコが、いかにも冷静そうに……そしてどこか面倒臭そうに……ライーサに問うた。

「……何よその反応！ 怪盗ライーサが参上したのよっ!? 少しは焦ったり驚いたりしなさいよ！」

「ああ、はいはい。こりゃあたまげたなあ」

「ちよっと……いかにもやる気のなさげな言い方、しないでくれる？ ……あ、それはそうと！」

不服そうに口を尖らせたライーサだったが、すぐに本来の目的を思い起こすと、グッコに向かつて杖を突き付け、高らかに言い放った。

「あなた、イースラの人魚たちの里から『わだつみの秘宝』を盗んだでしょう！  
それを渡しなさい！」

「……」

グッコはしばし押し黙った。少し考えをめぐらせている様子で、ライーサの方をちらりとうかがう。それから突然、口端を歪めて厭らしい笑みを浮かべた。

「……ああ、何だ、『わだつみの秘宝』か。確かに盗んだ覚えがあるなあ。イースラの物を、お前が欲しがってるなんて思ってもみなかったけど……。まあ、そいつは確かに俺が持つてるぜ」

ライーサはその台詞に杖を握り直して、その先を厭らしい笑みの持ち主へと向けた。

「なら、それを渡しなさい」

「それはできねえな」

グッコは即答する。

「一度手に入れたものは、俺のものさ。バストリアの人間なら、当然のことだ。あんたが俺より強いってなら、力づくでやってみな。それに実際のところ、俺は今、そいつを持ってねえんだよ。ねぐらの奥に大事にしまっただけあるもんでね……」

次にグッコが言い出すことが容易に想像できたライーサは、思わず顔をしかめた。

「そうだな、力づくでやって、どっちかが怪我をしてもお互いにつまらねえ。あんたがそれ相応の金を払ってくれたら、お宝を持ってきてやってもいいぜ」

案の定だ。しかも、彼はこちらが代価を支払っても「秘宝を譲る」とは明言していない。あくまで「ここに持つてくる」というだけだ。その後、土壇場になっているいろいろと条件を上乗せしてくる可能性だってある。ライーサは彼の狡猾さと貪欲さにうんざりしてしまっただけ、一応金額を聞いてみることにした。

「ふん。それで、金額は？」

「五百万レット……のさらに倍つてところかな」

「な……っ」

話しているそばから欲深く、値段を釣り上げてきたグッコに呆れつつ、ライーサは声を上げる。

「そんな金額、払えるわけがないでしょう！」

「じゃあ、この話はなしだ」

グッコはもう話すことはないとはかりに、くるりとライーサから身を背け、再び配下におあつらえ向けの屍を見繕みつくろう作業に入ってしまった。

ライーサはそのグッコの態度に、ついむかつ腹を立ててしまう。元はといえば、ただで、しかも他人の懐から盗み取った品だ。それをこともあろうに館一つも買えそうな大金を要求した挙句、交渉する態度すら見せないとは！ しかも、ライーサを小娘と侮つてか、彼は完全に馬鹿にした態度を取っている。背中をこちらに向けて、忌まわしい屍をいじり続けるグッコに、苛立ちが抑えきれなくなったライーサは、ついに再び杖を振りかざした。

「大人しく渡す気がないなら、お望み通り力尽くでやらせてもらおうわ！ セバスタ！」

呼ばれたセバスタが「はっ」と、素早くライーサの前に出る。

グッコがその声に、また面倒臭そうに視線をこちらに向ける。その余裕ぶった態度が気に入らないライーサは、鋭い口調で呪文を口にした。

「ライーサ、イーサ！ ディア、ヴァル、アスター！」

——ポンッ！

白煙が辺りに広がり、グッコの視界を奪う。さすがにグッコも顔をしかめて立ち上がり、こちらに今一度向き直った。だが。

「遅い！」

ライーサの良く通る声が、白煙の中で森の木立に反響した。グッコが身構えた瞬間、視界の中で、黒く巨大な物体が彼の視界を覆った。それは、二つの光る目を持った巨大な怪物だった。体は小山ほどもあり、グッコを一飲みにする勢いで、らんらんと満月のように光る眼で見下ろしている。続いて心なしか丸っこく見え

る身体をさらに膨らませると、怪物は虚空の闇を思わせる口腔を見せつけるように大口を開く。そして、がばりとグッコを飲み込むそぶりを見せた。

その迫力に思わず一瞬グッコはたじろいだが、さすがに彼もただ者ではない。すぐに体勢を立て直し……、

「こんな」

グッコは背後に横たえていた屍を引つ掴み、それを黒い怪物へと勢いよく放り投げた。

「子供騙しの術が通用するか！ このグッコ様を舐めんじゃねえ！」

グッコが放った屍は、小山のような怪物の脚に音を立てて打ち当たる。その大きさからすれば、せいぜい籠に小石をぶつきたくらいのはずなのだが、なぜか怪物は、その程度で体勢をぐらりとよろめかせてしまった。

グッコはその隙を逃さない。近くのもう一つの屍をずりりと掴み上げ、その首に容赦なく指を突き入れると、口の中で呪文を唱えてから指を引き抜く。

するとだらりと身体をぶら下げていた屍が、突如首をもたげ、すでに落ち窪み

眼球を失ったうつろな目を、怪物へと向けた。次の瞬間、屍はがばりと顎を開くと威嚇するかのように黒い怪物に向け、カタカタと骨を鳴らす。続いて、グッコは地面に手を付くとまた口の中で呪文を発する。

「来い！ 下僕ども！」

グッコの大声が辺りにこだまする。その声に応えるように、ぼこり、と土の表面から白骨化した腕が飛び出し、勢いよく数体の影が、墓地に降り注ぐ月光の下に立ち上がる。いつの間にか周囲を生ける屍たちに囲まれてしまった黒い怪物は、光る目に驚愕の色を浮かべ、身を固まらせた。

「セバスタ！ 戻りなさい！」

危うし、と見たライーサの声が響く。すると怪物……セバスタはポンツ、と、膨れあがらせていた身体を元の大きさままで縮ませ、「申し訳ありませんライーサ様ああ！」と泣きながら、主のところへと飛んで戻った。

すでに、幻術に必要な魔法の白煙は、完全に晴れ切ってしまった。ライーサの頬に冷たく乾いた風が当たる。獲物を取り逃がした屍たちが、こちらに一斉

に向き直る。虚ろさだけが満ちた双眸そうぼうがライーサを捉える。

屍たちの陰に隠れるようにして、グッコが得意げな顔でライーサを挑発した。

「『天才魔術師』も、大したことねえなあ。そんなに亡者どもを静かに眠らせた  
いってんなら……」

グッコの言葉に、立ち上がった動く屍たちが、一歩ずつ足をこちらに踏み出す。  
「まずはお前を、その中に加えてやるよッ！」

グッコの嘲るような声を合図に、屍たちが一齐にライーサ目がけて襲いかかる。  
ライーサは眉間に皺を寄せ、杖をくるりと一回転させた。

「ライーサ、イーサ……」

屍たちの爪が、牙が、ライーサの目前に迫り来る。

ライーサは息を吸い込み、マントの下から素早く一つの魔導具を取り出し、杖  
を敵へ向けて振りかざした。

「ディア、ヴァル、アスター！」

——ポント

白煙が再び周囲に勢いよく広がり、グッコが咳き込みながら、わずらわしそうに舌打ちをする。

「また子供騙しか！ 何度やっても同じだぜ！」

白煙の中、姿をくらませたライーサへ向かって、彼はわめき散らす。

「……そうかしら？」

どこか余裕を帯びた、良く通る声がグッコのすぐ隣から聞こえてきた。間もなく白煙がすつと晴れ、グッコは周囲を見渡し、さきほどの少女の姿を探す。

そして次の瞬間、彼はさすがにぎよつとしたように目を丸くした。

「なっ！ お、俺……っ？」

グッコの隣に得意気な笑みを浮かべて立っていたのは、なんとグッコ本人だったのだ。

もう一人のグッコはその顔を見て、「ふふ」と、どこか満足そうな笑い声を漏らす。ただの幻などではない。それが変化の術の類だと悟ったグッコに、もう一人の彼が再び笑いかける。

「どう？ 声までそっくりでしょう。それにこの姿なら、万一あなたの外見を認識させて操っていたのだとしても、対応できるわ。知っているのよ、あの屍たちは、呪文の主の声に反応して動いているんだって。あなた、狡猾なわりに、仕事の際はご丁寧な、自ら危険な戦場に足を運んでいるんですってね」

「……ちっ」

グッコがいまいましたそうに舌打ちをする。

「そりゃそうよね、だって、あなたの声がなければ、ご自慢の屍の下僕たちは、ぴくりとも動かないんですもの」

もう一人のグッコ……グッコに化けたライーサは、得意そうに言葉を紡ぐ。秘術を破られたと知ったグッコは、悔しそうにその凶相を歪めた。

「は！ だからどうした！ 俺の声だってまだ……って、うっ？」

グッコが虚勢を張ろうとするかのように大声でわめいたその言葉は、途中で素っ頓狂な声と共に中断してしまった。同時にグッコに化けたライーサが、くすりと、笑みをこぼす。一方のグッコは自らの喉元に手を当て、焦りと怒りの混じっ

た声を上げた。

「お前……俺の喉に……ッ！ 俺の声に何をしやがった……ッ！」

その声は、最早先ほどまでのしわがれたものではなく、やけに甲高い、風変わりな声色へと変化してしまっていた。

「ちよつとさっきの白煙に、魔法薬を混ぜ込んだだけよ。ちなみに数日はその声のままだから」

グッコはライーサの台詞に「何だとッ！」と、また甲高く風変わりな声でわめいた。

「さあ」

グッコに化けたライーサは、その姿を保ったまま、杖をくるりと回転させた。グッコの額に脂汗がにじみ、その肩が大きく揺れる。背後の屍たちは、グッコの新しい命令がないからか、まるで木偶人形のように、ぼんやりと立ち尽くしている。

「さあ、屍たちはもう私の下僕。あなたが新しい下僕を呼んでも、それを動かす

ためのあなた本来の声はしばらく戻らないわ。もう状況は分かったわね？ 力で敗れた以上、大人しく『わだつみの秘宝』を持ってきて、こちらに渡しなさい！」強い芯の通ったライーサの声に、グッコは力が抜けたように尻餅をついて、這いずるようにその場から逃げ出そうとする。

「往生際が悪いわね！」

ライーサは杖を振り抜く。

「ライーサ、イーサ！ ディア、ヴァル、アスター！」

呪文を唱えると共に、墓石や朽ちた柵を覆っていた蔦がロープのように動き、グッコの身体を捕える。そして、手近な樹木の幹へとがんじがらめに縛り付けてしまった。ライーサは身動きが取れなくなったグッコの前に立ち、大きく腕を組む。

「逃げられないわよ」

そしてライーサは杖をグッコの鼻先へと突き付ける。短い詠唱とともに魔力の光を発しはじめたそれを前に、グッコは「ひっ」と短い悲鳴を上げた。

「もう一度言うわ、グッコ。『わだつみの秘宝』を渡しなさい」

グッコはついに観念したかのように冷や汗をかいて、声を張り上げた。

「わ、分かった！ 俺が悪かったから許してくれ！ 白状する！ じ、実は『わだつみの秘宝』なんて、俺は盗んでもいねえし、持ってもいねえんだよッ！」

「は!? ここまで来て、嘘がまかり通るとでも思っているの？ あなたが盗んだことは、私の占いですでに分かっているのよ。……痛い目を見たくなかったら、正直に言いなさい」

ライーサがさらに凄むと、グッコはますます大量の冷や汗をかき、おしまいは涙目になって訴えた。

「ほ、本当だ！ 本当なんだよ！ 俺は何も知らねえんだ！ お前……いや、あなたを上手いことだまして、金を巻き上げてやろうと思っただけで……最初、あなたを無視したのもわざとだ！ どこかで適当に交渉に応じて、そこそこの金をせしめるつもりだったんだッ！」

「そう……残念だわ。自分の日頃の行いを、悔やむことね」

ライーサは冷徹にグッコに言い放ち、杖の先に力を込める。それはすでに、今にもあふれてほとばしらんばかりの、まばゆい魔力の光を放っていた。

「ぎっ……」と、グッコの歪んだ口元から悲鳴が漏れ出す。それを断ち切るかのように、ライーサは冷たい目でその呪文を口にした。

——バアン……ッ！

木陰から一部始終を見ていたアンジュがびくり、と目を閉じた。その刹那、暗鬱とした森の中に、大きな衝撃音が響き渡った。その音は木立の間で反響し、こだまとなって深夜の墓地を包み込んだ。ややあつて、瞼をそろそろと開いたアンジュが、こわごわと視線を戻す……。するとそこには、縛られた木の幹に寄りかかるようにぐったりしたグッコと、その前に口を引き結んで立っているライーサの姿があった。ライーサはすでに変化の術を解いており、元の奇術師風のマント姿だ。なおもよく見ると、ライーサの放った衝撃破の呪文は、グッコの頭上すれすれの木の幹に、斧で切り込んだような傷跡を作っていた。グッコがその傷跡の真下で、気を失って完全に伸びている。

「……ふーむ」

ライーサが苦りきった顔で、グッコを見下ろした。その脇で、セバスタが彼の頬を、つんつんと突いてみてから言う。

「……本当に気絶しているみたいですね」

「ええ」

本来の姿に戻ったライーサは、薄桃色の髪をひと束、指でつまんでひねりながら「おかしいわね……」と首をかしげた。術者の意識が途切れたためか、屍たちもとうに術を解かれ、墓場のあちこちに倒れ伏している。直後、隠れていたアンジュが、様子を見計らってライーサの元へ駆け寄って来る。

「ライーサ……!!」

アンジュの方を振り返ると、ライーサは不満げに口を開いた。

「こいつ……グッコは、欲が深いだけあって、自分の命を何よりも大事にするわ。だからさすがに命の危機とあれば、宝の一つや二つ、平気で差し出すはずなの。例えそれが、誰の物であろうともね。でも結局こいつ、最後まで『秘宝』の場所

を言わなかったのよね……」

ライーサは誇張ではなく、己の占いの腕に確固たる自信を持っている。  
なのに。

「ラ、ライーサ様、まさか……」

セバスタがはつとしたように言う。

「そう。私の占いが間違ってたんじゃない」

ライーサは自分の考えを確かめるかのように、口に出す。それはもはや、確信となつて浮かび上がってきた考えだった。

「『外された』んだわ……」

ライーサよりも強い魔術を使える者に。ライーサよりも強い魔力を持った者に。  
ライーサの占いは、『操られて』、『外された』のだ。

事態の深刻さを悟ったアンジュの心細げな顔に、夜の墓場の冷たい風が吹きつける。そして、あざ笑うかのようにその頬の温度を奪っていった。

## 第三章

「仕切り直しだわ」

ライーサはテーブルの前に腰を下ろしながら、眉根を寄せてそう言い切った。あれから彼女たちはライーサの住処へと戻り、次の朝を迎えたのだった。

「まさか私の占いの結果に介入されるだなんて、思いもしなかった。<sup>うかつ</sup>迂闊だったわ……」

ライーサはテーブルに並べられた朝食を、ぶすつとした顔で口に運ぶ。ちなみに今朝は、野菜のキッシュを作ってみた。

「やっぱりライーサの料理は美味しいですねえ」

キッシュを頬張りながら、アンジュはうつとりと顔をとりけさせる。ライーサは秘宝の行方よりも、目の前の料理の方が大事とでも言わんばかりのその様子に、若干呆れてしまった。

「話を聞きなさいよ、そもそもあなたのことでしょう？ 秘宝を盗んだ犯人が、

また分からなくなっちゃったって言うてるのよ？」

「ライーサは、このお料理が美味しくないのですか？」

首をかしげてにこにこ問いかけるアンジュに、ライーサは、

「そりゃ、美味しいけれど」

と、うっかり流されそうになってから、はっと我に返る。慌てて「そうじゃなくって！」と、切り返す。

「私の占いが当てにならなくなっちゃったら、秘宝の行方の探しようがないですよ。例え聞き込みをしたって、このバストリアじゃしよっちゅう盗品が行き交ってるし、イースラ絡みとあればいろいろと面倒も多い。簡単には見つからないわ。それに……」

「今日はお天気が悪いのですねえ」

カップのスープを静かに飲みながら、アンジュは言う。ライーサの言葉など聞いていないかのような様子で、窓の外で降りしきる雨を見つめて、のんびりした口調だ。

「だから、話を聞きなさいってば。このままじゃ、あなたの『わだつみの秘宝』は……」

言いかけたライーサだったがアンジュがそこで視線をライーサへ移し、その黒髪に飾られた花のような顔をほころばせたので、思わず口をつぐんでしまう。ライーサはいつの間にか、その微笑みに気圧されてしまっている自分に気づく。

「大丈夫ですよ」と、アンジュは微笑んで言う。

「大丈夫ですよ、ライーサ。焦らずとも、きつと『秘宝』は取り戻せます。今は術を見出せずとも、その内きつと行く手に光明が差します。最初はわたくしも不安でしたけれど……今は、何だか落ち着いていられる気がするのです。……それに、焦っても何も良いことありませんわ」

アンジュの落ち着いた物言いに、ライーサは自分が、思っている以上に気が急いでいたことを自覚する。絶対的な自信のあった占いの技。それに介入されたという事実も、それに拍車をかけていたのだろう。

そうだ、占いが頼れなくなったからといって『秘宝』が泡と消えてしまったわ

けではない。しかも自分は、今まで『一族由来の品』を追い求めて、あちらこちらを飛び回ってきたではないか。

雨粒が窓へ当たる音が部屋の中へ染みとおり、雷の音が遠くに聞こえる。ライーサは息を一つ吐いて、自らもスープへ口をつけた。

「……そうね。焦っても、良い方法が浮かぶわけでもないわよね。あなたの言う通りだわ」

アンジュはライーサのその様子に、嬉しそうにまた顔をほころばせる。

「そうです。わたくし、焦ってお屋敷を飛び出して来てしまつて、大変な目に遭いましたから。ライーサが助けてくれなかったら、わたくし今頃、どうなつていたことか……」

アンジュは自らの失態を語り、はにかむように笑つて見せる。

「確かにね」

ライーサも、身をもつて知つた体験を語るアンジュの様子に、つい笑みがこぼれてしまう。

「……ライーサに会えて、良かったです」

アンジュは目を伏せ、どこか独り言のようにつぶやいた。その無垢むくでまっすぐな言葉を、ライーサはどう受け止めたら良いのか分からず、食卓に少し間が生まれる。

——私も……。

ライーサは、無意識に口に出そうになった言葉にふと気づいて、慌てて押しとどめた。しかし彼女の意に反し、顔にかすかな熱が点るのは、やはりどうしようもなく。

——『あなたに会えて良かった』、だなんて。

今まで、誰かに言われたことがあっただろうか。似たような言葉なら、いつか、とても昔に言われたような気がする。ライーサはそんなことを思いながら、依然熱を持った顔を隠すように、窓の外をうかがうふりをして、目の前の少女から視線を外した。そして降りしきる雨粒が、窓ガラスに弾かれて流れ落ちたのを見た瞬間……懐かしい言葉が、記憶の中で蘇る。

——『あなたが……生まれてきてくれて良かったわ』

ああ、そうだ。ライーサは思い至る。同時に、その言葉にふわりと被せられた、懐かしい微笑みと優しい声色を思い出す。そして、あのグッコとの戦いの前、アンジュにかけられた言葉に覚えた既視感の正体にも。同時に彼女は、胸の内側にある門にかけられた掛け金が、微かな軋みを上げたのを感じた。

そうだ、この少女は……アンジュの持つ雰囲気は。

ライーサは静かに、急に熱を持ち始めた心の内で思った。

あの日の、母に似ているのだ、と。

※※※

焦りの中で、日々は駆け足で過ぎて行つた。いつしかアンジュがライーサたちの隠れ家に腰を落ちつけてから、半月ばかりが過ぎてしまっていた。今ではセバスタもだいぶアンジュと打ち解けてきている。本来気が優しいところがある彼は、

いつの間にかアンジュに同情しているようでもあった。そんな二人が食事時などにたまたに会話を交わし、談笑している光景を見ると、ライーサもなぜか、とても心地が良いのだった。今まで二つの声しか響かなかった部屋の中に、三つ目の声加わった……ただそれだけで、灰色の壁と冷たい土に覆われたこの家が、なぜか鮮やかに色づいて感じられるのだ。

狭いがしつかり設備は整った浴槽に身を浸し、髪を乾かしては二人のベッドで休む夜。アンジュはいろんな話を語ってくれた。ライーサもまた、たくさんの話をアンジュに伝えた。ライーサにとってはごく平凡な出来事も、生粋の深窓育ちのアンジュにとつては物珍しいらしく、いちいち大げさなほどの様子で聞き入ってくれるのだった。そのたびにライーサはちよっぴり得意な気持ちになり、ますます話に熱が入る。話は時折、身振り手振りまで交えたものになった。アンジュの透き通ったガラス玉を転がすような笑い声は、まるでライーサの心に深く沁みとおるようで、本当に楽しいのだ。

いつしかライーサは、こんな生活がずっと続けば……と知っている自分を自覚

することすらあった。そんな気持ちだが、日々試している占いの精度を鈍らせているのかもしれない、と心のどこかで思うことすら。そのたびにライーサはそんな自分を叱咤するかのようになり、甘えの気持ちを振り切つてから、杖を水晶玉にかざすのだった……。

そして、そんな長い戸惑いとかすかな幸福の日々の中の、ある夜。

例によつて、もう何度目かの占いの術を試していた時。

「ダメだわ……」

水晶玉がすっかり曇つてしまったことにライーサは肩を落とした。だが今一度だけ、とライーサが杖を振りかざしたその時、セバスタがふわふわと浮きながら、物置から何かを持ち出してきた。

「ライーサ様、私、ちょっと思いついたことがあります。こちらの品などはいかがでしょうか？」

それは不思議な模様が描かれた香炉と、一片のバターのような小さな塊だった。一目みて、なるほどね、とうなづくライーサに、

「それは？」

と、アンジュが首をかしげて尋ねてくる。

「これは、闇の使いを呼び寄せる魔法の香料なの。腕力じゃなくて知恵や透視の力を持つ存在が呼び出されるのよ。本来は魔術師が古い呪文や太古の知識を得るために使われるものなの。ただ効果が一定じゃなくて、どんな存在が現れるかは分からないのよね。決して安いものではないから、乱用はできないし……でも、これを失せ物探しに使うっていうのはいいアイデアだよ」

ライーサがそう答えると、アンジュはおずおずと再び尋ねてくる。

「でも……いいのでしょうか？ わたくしのために、そんな高価なものを……」  
「いいのいいの！ あまり古くてもダメになっちゃうから、こういう時にでも使っておかないとね！」

魔法の香は魔力がこもった品だけに本当はそんなこともないのだが、照れ隠しにライーサはそう言った。そしてセバスタに命じ、早速香を焚く準備を始める。やがて、暗くした部屋の中、蠟燭の光がライーサたちの顔を照らし出した。

「ライーサ、イーサ……ディア、ヴァル、アスター！」

召喚者の名を呪文に織り込む意味もあって、必要な詠唱の最後を、自らの呪文で締めくくったその刹那……、

——ピシャーントツ！

窓の外に雷鳴が突如轟き、部屋の中に色濃く漂っていた暗闇を一気に消し飛ばした。

「——きゃっ」

アンジュが激しいかずちに思わず声を上げる。ライーサもぎよつとして、いかづちの音が轟いた窓の方を見やった。留め金が壊れたのか、閉め切っていたはずの窓が、いつの間にか開いている。そこから狂風が舞い込み、カーテンを激しくはためかせると、部屋の中の空気をどうつとかき乱した。

再び雷鳴が轟いた次の瞬間。ライーサたちの視線は風の吹き込む窓辺に、くぎ付けになった。そこには、灰色の霧をまとった黒い人影が、悠然と現れていた。

「あら……」と、帽子をかぶった不思議なその人影が、微風のような声を発する。

続いて大きな羽音がばさり、と部屋の中に響いた。同時に雷鳴と風が収まり、蠟燭の明かりが揺らめいて、再び部屋の中を明々と照らし出した。

「あら……、一足……、遅かったわ……」

とてもかすかな、風のささやきのような声。ライーサは、ようやく取り戻された明かりの中で容貌を明らかにした人物に、目を丸くした。

「……墮天使!？」

己の種族名を呼ばれ、その人影……黒園で魂を管理するその墮天使は、まるで愛おしい者でも見るかのように、ライーサを見つめ返した。再びばさり、と、大きな羽音が部屋へ響き渡る。たっぷりのふわりとした髪に、真っ赤なつばの大きな帽子、……帽子の上には、くすんだ色の花々が添えられている……さらにその身体の脇に広がる、黒く美しい両の翼と、悲哀に濡れた印象的な瞳。

「初めまして、哀しみを背負う魔術師さんと悲劇の歌姫さん……私は、墮天使。『悲哀の墮天使ニルシー』と名付けられた者……」

ニルシーと名乗った彼女は、ふわりと部屋の中へ降り立ちながら、どこか悲し

そんな微笑を浮かべて、そつとアンジュへと近寄った。そして、戸惑うアンジュの様子もお構いなしに、その頬を両手で包み込み、まるでキスでもするかのよう  
に顔を近付けた。

「ああ……せつかく良い悲劇と落胆の気配がしていたというのに……。もう止んでしまったの……。？　でも、これもまた悲劇だわ……。悲劇が止んでしまったという、悲劇だわ……」

アンジュはニルシーのあどけなくも美しい顔を間近に見て、「あ、あの……。っ」とひどく狼狽したが、ニルシーは彼女を解放する気配がない。それどころかニルシーの顔が、さらにアンジュへと近付けられていく。

「可哀想な歌姫さん……。あなたからは、まだまだ悲劇的な運命の香りがするわ……。それはそれは素晴らしい悲劇の香り……。ああ、その時が待ち遠しい……。」

「何、わけのわからないことを言っているのよ！　あなたが魔力の香から呼び出された知恵者なの？　ならさっさと、私たちに必要な知恵を授けてちょうだい！」

ニルシーの唇がアンジュのそれに触れる直前で、ライーサはつかつかと二人の間に割って入ると、アンジュの肩を引いて、奇妙な趣味を持つ墮天使から小柄な少女を引き離す。腰に手を当てて言い放つライーサに、ニルシーは「そうね……」と、少し残念そうにつぶやく。それでもどこか余裕ありげな様子で、次はゆつたりとライーサへ視線を移した。そしてニルシーは今度はライーサの近くへ、羽音を立ててするりと近づく。

「な、何……」と、ライーサが気圧されていると、ニルシーは悲哀に満ちた目を細め、先ほどアンジュへしたように、ライーサの頬を両手で包み込んだ。

「この魂の香り……あなたもまた、大きな哀しみを秘めているのね……」

ライーサの背筋に、ひやりと細い氷柱が差し込まれたような感覚がした。

「そう、『その日』から、ずうっと……」

ニルシーの言葉にどきりとした胸中を隠すように、ライーサはその冷たい手を、少し乱暴に払い除けた。

「何を言っているのか……分からないわ」

ニルシーは、ふふ、と、また愛おしそうに笑って、そつと身を引く。

「あら、気の強いこと……けれど、あなたも魔術師と盗賊、両方の闇の世界に身を置いているのでしょうか？　なのにイースラの者に手を貸すなんて……いずれきつと、悲劇が舞い降りないとも限らないわよ……？」

「そ、そんなことないわよ」

ニルシーの言葉に不吉なものを感じながらも、ライーサは気丈にそれを一蹴する。

「それよりあなた、知恵を授けてくれるの、くれないの？　用がないなら帰ってくれないかしら。ここはバストリアの地なんだし、この家以外にも、あなたのお気に召す『悲劇』とやらが、たくさんあるはずよ」

その冷たい声にもニルシーは微笑みを崩すことなく、狭い部屋の中で羽根をいっばいに広げ、仰々しく宙に浮き上がった。

「そうね……では、古き聖刻の書との盟約に従い、あなたに私が知りうる知識を授けましょう……」

窓から再び流れ込んできた灰色の霧と淡い月光を背負って、ニルシーがライーサとアンジュへと濡れた瞳を向ける。そして、彼女は小さな唇を微かに動かし、ライーサとアンジュへ語りかけた。

「あなたが知りたいのは、とある宝物の在処……それについてなら、最近非業の死を遂げた魂から得た手がかりがあるの……」

風がニルシーの髪をなびかせて室内に黒い羽根を舞わせ、その風はそのままライーサとアンジュの頬を撫でる。蠟燭の炎が、ぼつといきなり燃え盛る。そんな厳粛な雰囲気の中、ニルシーが静かに続ける。

「人魚の里の近くで遭難した、イースラの船乗りの魂の叫びよ。その者の魂が、消え行く前にこうつぶやいていった……『わだつみの秘宝』を盗み出した者は」  
それは、憂愁を含みつつどこか楽しげでもある、曖昧な墮天使の助言そのものだった。

「バストリアへと舞い戻る時、『常闇』の力を借りた、姿隠しの魔術を使っていたそうよ」

次の瞬間、ニルシーの口端が淡く歪む。間髪入れず、再び大きな雷が窓の外に鳴り響いた。その閃光が部屋に弾けたあとには、悲哀の墮天使の姿は、すっかり消え失せていたのだった。

#### 第四章

「お呼びでしょうか、我が『常闇』」

片膝を床に付いて頭を垂れた男が言うと、『常闇』と呼ばれた女性は、ああ、と、気のないような、それでいてひどく妖艶な色気を含んだ声を発した。

「あなたごとき、私はわざわざ呼んでなどいません。そちらが勝手に訪れたのでしよう……」

男が若干の戸惑いを見せると、『常闇』と呼ばれた女性は、その紫色に輝く瞳をすっと男の方へと向けた。

「違うのですか？」

その瞳がたたえる冷徹さに、男は慌てて答える。

「いえ、そうです。わたくしめが、畏れ多くも自ら『常闇』の元へと訪れました」  
その男の返答に、女性……『常闇の魔女プローセナ』は、ほんの少し満足げな気配を見せ、そのまま男から視線を外してしまった。それきりプローセナが黙り込んでしまったので、焦った男は、不安にたまらず口を開く。

「と、『常闇』……?」

「あなたは、これをどう思います?」

唐突に、プローセナは男に語りかけた。その手には、青い宝石を中心に金の装飾で飾り立てられた、豪華な首飾りが携えられていた。彼女がそれを胸の前に掲げると、青い宝石が室内の豪華な明かりに反射し、豊かな光を放つ。プローセナは、目を細めるようにして、その首飾りを眺めている。

「……美しい?」

ふと、独り言のように。彼女は己の下僕たる男に問うた。短い質問だが、男は一瞬、返答に迷った様子を見せる。確かにそれは美しい光景ではあった。だがこ

の絶世の美女は、安易な返答など求めていないに違いなかった。男が答えあぐねていると、プローセナはゆつくりと首飾りから視線を外し、男の方へと向きなおる。男はたちまち、濃密な色気をたたえた紫の瞳に囚われ、身体を硬直させる。

「私に、似合うかと聞いているのですよ？」

プローセナはいかにも優しそうに微笑んで……男に再度問うた。男はその微笑みに誘われるかのように、小さく喉を震わせ、声を絞り出す。

「……良く、お似合いです」

その言葉に彼女は、ようやく真に満足したかのような表情を見せる。そして、首飾りを携えていない左の手を、男の方へと差し出した。ひととき妖艶な声が女性の唇から漏れ出し、男の鼓膜をとろかすように包み込んだ。

「……いらつしゃい」

男はようやく膝を床から離し、『常闇』の元へと、その闇の中へと、その魂を飲み込まれるためにふらふらと立ち上がった。

※※※

「『常闇の魔女 プロローセナ』……さん？」

アンジュはテーブルの上の食事を、慣れない手つきで切り分けながら尋ねた。ライーサも同様にしながら、ええ、と短く言葉を返す。

「あの堕天使……ニルシーの言葉を信じるならね。『常闇』の魔術を使う者……そして、私の占いを妨害するほどの力を持つ者は、この近隣にはプロローセナしかいないわ。でも……」

途中で言葉を途切れさせたライーサに、アンジュは小さく首をかしげた。食事を口に運ぶ手を止め、彼女は少し思案する表情を浮かべている。

「プロローセナは、確かに強い魔力の持ち主で……性格にも少し難ありと言えば難ありなんだけど。でも『わだつみの秘宝』とは、どうも彼女の印象が、あまり結びつかないのよね。その秘宝は美しさだけで言えば、世界に並ぶものがない、というほどでもないんでしょう？」

「ええ……最高の細工を施されてはいますが、さすがに宝石としての価値だけを問えば、最上の物ではありません。特定の力を持つ魔法の宝に執着していたり、歌を生業とする者なら話は変わってくるのかもしれませんが……」

「プローセナは闇の森に館を構えている、黒魔術専門の魔女よ。自分から歌うなんてことはしないし、そういった分野の魔法の品に興味もないはず。だからって、ニルシーが嘘をついたとも、思えないし……」

ライーサはうーん、と難しい顔になって、首をひねる。

「しかし何も手掛かりがない今、ニルシーさんの情報を頼りに動くしかありません。プローセナさんというお方は、どちらに？」

アンジュが真剣な面持ちでライーサへと問う。しかし、やはりその話しぶりは、グッコの時同様、話し合いで『秘宝』を返してもらおうという望みを捨てていないようにも見える。そのお人よしぶりにライーサは軽いため息を吐いて、アンジュに答えた。

「バストリアの『闇の森』。その中に構えられた『常闇の館』が彼女の住処よ。

でもね、先に言っておくけど、もしプローセナが『秘宝』を持っていたとしても、やっぱり穏便な話し合いじゃ済まないと思うわ。グッコの時と同じにね」

「ですがライーサ、さきほどそのプローセナさんは、『秘宝』に執着したり、深い興味を持つような方ではないと……」

困惑気味にアンジュは言う。

「まあね。でもそれも、ただの私の推測に過ぎないわ。何かの研究に、どうしても必要になったのかもしれないし。ま、とにかくどういう経緯であれ、自分の手の中にあるものを簡単に手放すような奴は、このバストリアにはいない。プローセナだって、それは同じよ」

ライーサの淡々とした言葉に、アンジュは黙り込んでしまう。ここが、イースラとは根本的に価値観が異なる国であることを痛感しているようだった。ここは魔王国バストリアだ。強くなければ生きていけないし、他者に要求ひとつ、聞いてもらうことすらできない……強くなければ。

「でも、そうね」

ライーサは一口、香り高い蜜桃の果汁を口に含むと、それが入っていたグラスをテーブルに置いた。グラスの中で揺れる淡い色のついた液体を、そっと見つめて口を開く。

「プローセナはグッコなんかとは比べものにならないくらい、厄介な相手よ。取り引きに応じたとしても、彼女が欲しがるのはきつとただの金銭や宝じゃない。彼女が一番求めるのは、高貴だったり力が強かったりする『男たちの魂』なの。己の魔力を高めるためのね。……そんなもの、あなた用意できる?」

ライーサの言葉に、アンジュは絶句した様子だった。もちろんライーサにだって、そんなものが用意できるはずもない。

「で、では、どのように……」

いつかのグッコとの戦いの前のような、しかしその時以上に不安そうな顔で、アンジュが尋ねてくる。

「だからね」

そしてライーサも、あの時と同じように、自信に満ちた顔で答える。なんといい

つても、ここはバストリアだ。

「やっぱり、奪い返すしか、ないでしょうね」

バストリアは、力が支配する国。強くなければ……守りたいものすら、守れない。

「……三日間、時間をちょうだい」

ライーサはアンジュに、静かな声でそう申し出た。

※※※

「ライーサ様、一体どうなさるおつもりですか……?」

暗い地下階段を下りながら、横のセバスタが尋ねてくる。ここは、かつてライーサが暮らしていた館……その離れから地下につながる、隠し階段の途中である。上の館は見る影もなく焼け落ち、宝物蔵ごと襲撃者の略奪にあってしまったものの、辛うじてここ——魔術書を集めた地下書庫だけは、難を逃れることができた

のだ。ライーサは手にした杖の明かりを頼りに、慎重にその細い階段を踏みしめながら、セバスタの問いに答えた。

「お母様の呪文を習得するわ。そして、場合によってはあれも」  
隣でセバスタが驚きの声を上げる。

「し、しかしあの呪文と魔導具は……」

「いいの。もう決めたことだから」

この階段の先に存在する地下書庫には、大量の書物が所蔵されている。その中に、あの時母が使った呪文の秘術が記されているはずだった。

「しかし、ライーサ様……」

不安げに、セバスタがライーサへと声をかける。返事の代わりにライーサの唇が、その意志の固さを示すようにきゅっと引き結ばれた。

親の呪文を受け継ぐのは、口で言うほど甘いものではない。ライーサの場合、生粋のバストリア生まれである父の攻撃的な魔法群よりも、グランドルの流刑者の血を引く、母の防御的なそれの方が受け継ぎやすいという傾向はある。とは

言え、その秘術を短期間で習得するのは、非常な困難を伴うはずだった。

「差し出がましいようですが、この短期間でお母様の呪文を習得するなど……無茶ではありませんか？ ライーサ様のお身体が……」

「平気よ。セバスタも、手伝ってちょうだい」

「でも……」

セバスタはなおもごによごと何事か言い募っていたが、やがて完全に押し黙ってしまった。

「……セバスタ？」

それを不審に思ったライーサが声をかけると。

「ライーサ様は、すぐにそうやってご自分の事を後回しになさる……」

セバスタはその丸い顔をうつむかせ、つぶやくようにそう漏らした。ライーサが優しく彼をなだめようとしたその時、セバスタは不意に、もう我慢しきれないというように大声を出した。

「他人にお優しくあろうというお気持ちは分かります！ ですが、もう少しご自

分をいたわってくださいませ！ あのアンジュという娘は、確かにまっすぐな性質を持った、純粹で哀れな少女です。しかし、しかしお嬢様がその身を削つてまで気に掛ける筋合いはありません！ このセバスタには、お嬢様の身の安全が第一なのです！ 他人にお優しくあろうとするのであれば、どうかまずご自分に対して、そうあってくださいませ……！」

セバスタは小さな身体から可能な限りの声を絞り出して、ライーサに訴えた。それは今まで言えなかつた事を一気に吐き出したかのような、とても強い口調だった。

「……ごめんね、セバスタ」

しかし、セバスタは今度は返事をしなかつた。すねたように顔を壁へと向けてしまう。ライーサはその小さな背を見つめ、そつと忠実な下僕へと語りかけた。

「あのね、セバスタ……私は、十分に自分に優しくしているつもりよ」

黒くて丸い小さな背に、ライーサはそつと手を当てる。だが、セバスタは頑固に振り向かない。長い付き合いで、ここまで彼が頑固な様子を見せるのは、初め

てのことだ。ライーサはなおも続けた。

「……私ね、あの子と出会ってから、何だかとても楽しいの。でもね、この前ベツドで休む時に聞いちゃったのよ。あの子がもしこのまま『わだつみの秘宝』を取り戻せなかつたら、あの子は大長たちに罰として、海の奥深くに幽閉されちゃうかも知れないですって。私ね、そんなことになったら、きつと自分が許せなくて、悲しくなっちゃうと思うの。だからね、セバスタ」

今度はひときわ、強い意志を込めて声をかける。ライーサが手を当てている背が、心なしか小さく震えたようだった。

「これは、あの子のためと言うより、自分のために行っていることなの。自分が、私自身が、悲しい気持ちにならないために。あの子がどこかに幽閉されて、人々の前であの美しい声を披露する機会が失われてしまうなんて……私自身が、嫌なの」

「……ライーサお嬢様は、お優し過ぎます」  
セバスタが背を向けたまま、ぼつりとこぼした。

「優し過ぎるのは、どっちかしら？」

ライーサは、その小さな背に微笑んで言った。すると、ようやくセバスタは少しだけ振り向き、主の顔をちらりとうかがった。そして。

「……ご無理だけは、なさらないでくださいませ」

という小さな声が、ライーサの耳に届く。小さなお供のお願いに応えるように、ライーサはまた、にっこりと笑って見せたのだった。

※※※

三日後。ライーサとアンジュは、『常闇の森』にいた。プローセナの館があるこの森は、最深部では闇が深過ぎて星の明かりさえ届かないほどだ。そのため、ライーサとアンジュは、今は魔術で灯した明かりを頼りに、その森の中を進んでいるのだった。

「ぶ、不気味なところですね……」

アンジュが言い、ライーサはいつものように強がって答える。

「そりゃあ、ここはバストリアでも一番深い森だもの。生者は誰もが怖れて近寄らない、伝説の死霊王……ロヴオスの墓所にほど近い場所でもあるしね」

「そ、そのような恐ろしい場所に……わたくしみたいな者が訪れて、良かったの  
でしようか……」

「まったく、あなたは怖がりね。目的のためには手段を選んではいられない……  
そう、『龍の宝を狙うには、龍の勇気が必要』なのよ！」

バストリアの盗賊の間でよく使われる言い回しで、ライーサはアンジュを励ま  
そうとする。しかしその途端、足元の小枝がぱきり、と乾いた音を立て、ひつ、  
とアンジュが息を飲む。ライーサも少々びつくりしてしまい、一瞬、その場の空  
気が固まってしまった。

「そ、そうだ、歌でも歌いましょうよ！　ね、あなたは何か、元気が出るような  
歌、知らないの？」

「そ、それはいくつかは知っていますけれど……この森の主を、怒らせることに

なりはしないでしょうか……?」

「大丈夫、大丈夫! 『常闇の館』はもつとずっと深くにあるから。きつと聞こえやしないわ。さあ!」

わざとらしく脳天気を装ったライーサの声に、アンジュはおずおずとうなづき、小さな声で歌い始めた。婚礼や世継ぎの誕生など、めでたい祝いの席で歌われるというそれは、ほがらかで明るい調子を持ったもので、ライーサもすぐ覚えてしまった。先日から口数が少なくなってしまったセバスタをも無理やりに促して、ライーサたちは地獄のように暗い森の中を、どこまでも進んでいった。

……やがて獣道のようなだった森の小道が、整備された石畳のそれへと変わる。そして、ついに二人の目の前に、堂々とした館が悠然と姿を現した。周囲のあらゆる物音さえも、まるで深い沼のように飲み込むかのような、闇然たるたたずまい。その屋敷は、竹まいだけで、主の闇の力の強さを物語っているかのようにもあつた。

「こ、こちらに、プローセナさんが……」

アンジュが館を見上げて、若干怯えたような声を発する。ライーサはアンジュの震える手を取り「大丈夫よ」と、できるだけ優しく言っただけ聞かせた。

「プローセナは確かに力の強い魔女だけど、私だって『天才魔術師』の異名を取っているんだから。必ず『秘宝』は取り返してみせるわ」

その言葉に、アンジュは口をきゅつと結んで、しっかりとライーサを見つめ返してから、強くうなづいた。

「ありがとうございます、ライーサ」

そうして、彼女はライーサの手を、ぎゅつと握り返してくる。手をつないだ二人の少女は、行く手に立ちふさがるかのような『常闇の館』を、強くにらみつける。

「行くわよ」

ライーサの声を合図に、ついに一行はその館の中に足を踏み入れたのだった。

※※※

館の入り口には大広間が広がっていた。豪華な絨毯じゅうたんに、光り輝くシャンデリア。かつてライーサが住んでいた屋敷と比べてすら、大きく作りやその規模が異なる。やがて。

——コツン。

磨かれた石を踏む小さな音が、入り口のホール内に響き渡る。その音は、静かな水面に雫を落としたかのように、閑散とした館の中に響き渡った。ライーサとアンジュ、そしてセバスタが、音がした階段の上へと視線を送る。続いて、なめらかな床を踏む靴音とともに声が響いた。妖艶で気高く、そしてどこか冷徹な声

が。  
「私に何か用？　小さな魔術師と見慣れぬ娘さん……」

階段の上に姿を現したこの館の主……プローセナはそう言って、ライーサたちの前に堂々と立ちはだかった。

「……あなたたちの呑気な歌声、とうにこの館にまで届いていましたよ？」

「そ、それはどうも！」

氷のように鋭い眼差しを送ってくるプローセナに、ライーサは無理に胸を張って答える。アンジュとセバスタはと見れば、完全に小さくなってしまつて声も出ないようだ。

「それで、私にいったい何のご用？」

プローセナはゆつくりと唇を開き、あくまで冷徹に言った。流れるようにきらめく金髪、男たちを一瞬で虜にしてしまうという、妖しい魅力と光を秘めた紫の瞳。背は高く、すらりとした手足がしなやかな獣のように美しい。加えて、その美貌を最大限に飾り立てる、大ぶりのフリルたつぷりの豪華なドレスを身にまとっている。その姿だけで、ライーサは圧倒されそうになる。彼女はその暴力的なまでの存在感に負けまいと、杖を握りしめて、きつ、とプローセナを見据えた。

「プローセナ。あなたに一つ、聞きたいことがあつてきたの」

身体の震えを抑え、ライーサはごく冷静を装つて声を振り絞る。階上のプローセナは、まるで何か楽しいことでも見つけたかのように、その美貌をゆつくりと

ほころばせて、短く言った。

「面白いですね……言ってごらんなさい」

ライーサは息を一つ吐いて、言葉を続ける。

「もしかして、あなたが『わだつみの秘宝』を持っているんじゃないかと思って」  
その言葉に、プローセナの口元がふっと歪んだ。彼女は無言で、自らの頬の辺りまで右手を掲げてみせる。次にその掌の上へ、不思議な光を放つ魔力の粒子を、小さな銀河の如く集約させた。やがて、うねり渦巻く小さな黒い銀河が凝縮し、暗黒がより濃くなった中心に、何かの影が現れた。

「……これのことかしら」

プローセナが目を細め、アンジュが「ああっ」と声を上げる。いつの間にか、プローセナの掌の上には、青い宝石を黄金の装飾で飾った、大きな首飾りが現れていた。

「ラ、ライーサ！ 間違いないです！ あれは、あれは我が一族の……、『わだつみの秘宝』です！」

「……分かったわ。それさえ分かれば、ここからは私の仕事よ。あなたは下がっていないさい」

「で、でも……本当に大丈夫なのですか？」

「いいから、私に任せて」

「ライーサ……」

アンジュが今度こそ本当に不安そうな顔で、ライーサの名をつぶやいた。ライーサはその声をしっかりと記憶にとどめてから、手振りでもアンジュを後ろへと下からせる。そうしておいて、ライーサはもう一度プローセナの方へと向き直った。「プローセナ、私、それがどうしてもほしいの。できれば、譲ってくれないかしら」

プローセナは少し意外そうな顔をしたが、あくまで妖艶な微笑みを崩さない。

「へえ。……で、あなたはそれに代わる報酬でも用意しているのかしら？」

「いいえ」

ライーサはその言葉に静かに返す。全て、覚悟をしていたやり取りだ。プロー

セナは微笑んだまま、階段上からライーサを見下ろしつつ言った。

「ならば、譲れませんか。どういった事情があるのかは知らないけれど、これはすでに私のもの。先日ゆかりの者が、とある場所から手に入れたのですよ。どうしてもほしければ……」

プローセナが言葉紡ぐと同時に、館の入り口の小広間内の空気がびりびりと震え始める。やがて、プローセナの艶然たる声がライーサへと放たれた。

「あなたのその手で、盗りにいらつしゃい」

プローセナが静かに笑うと同時に、彼女の背後で、漆黒の深い深い闇が爆発した。ライーサも、まるでそれが合図でもあったかのように、小さな杖を振りかざす。

「ライーサ、イーサ！　ディア、ヴァル、アスター！」

杖の先から光の球が生み出され、プローセナの方へと撃ち出された。それらがまばゆい光を放つて弾けると同時に、ライーサはプローセナの前へ駆け出す。狙いは、その掌の上の首飾りだ。だがプローセナはその動きを見透かしたように、

それを取り出したのと同じ漆黒の闇の中に飲み込ませてしまう。続いて、プローセナは右手をライーサの方へと大きく向けた。たちまち、背後の闇がまるで意志を持った鎖のようにほとぼしって、ライーサをその中に捕えようとした。ライーサは素早く、再び自らの呪文を唱える。今度は手にしたシルクハットの中から虹色の光があふれ出す。それは黒いビロードのような常闇の中に光の奔流となって流れ込み、その黒を薄め、中和していった。

「さすがは『夜を盗むもの』」

プローセナがライーサを見据えたまま、感心したようにつぶやく。

「しかし」

次の瞬間、階段の上に到達したライーサは、さっと身構える。プローセナの掲げられた掌の上に、闇を煮詰めたような大きな球が、ゆっくりと浮かび上がった。からだ。

「所詮は小技……私の『常闇』の力には敵かないません！」

プローセナはその手から、闇の凝縮された魔力の球を勢いよく放った。弾けた

それはそのまま黒い衝撃波となり、ライーサへ勢い良く向かってくる。

ライーサも素早く呪文を唱え防御しようとしたが、その力はプローセナの絶大な魔力の前には、ほぼ無力だった。黒い衝撃波に吞まれ、ライーサの身体は一気に階下まで吹き飛ばされてしまった。アンジュがライーサの名を叫ぶ声が響く。

間一髪のところ、大きく身体を膨らませたセバスタが、石の床とライーサの身体の間を割って入ってくれた。そのおかげで、ライーサは何とか固い床に叩きつけられることから逃れることができた。だが……。

「どうしました？ 私の方はまだ、手遊びの域にも達していませんよ」

プローセナがライーサを見下ろしながら言う。セバスタがクツションになってくれたとはいえ、やはり力の差は歴然……特にさきほどの衝撃は強烈だった。背中の中の痛みに息が上がって、呪文に集中できない。ライーサが唇を噛みしめた時、プローセナが何を思ったのか、常闇にも紛れぬ甘美な唇をにっこりと緩ませた。ライーサははつとする。……その紫の瞳は、ライーサを気遣って飛び出してきた、アンジュへと向けられている。

「ふうん、実際のところ……実は、彼女のほうこそが、あなたの『宝』というわけなのかしら？」

ライーサの背筋に、ぞくりとする悪寒が走る。

「……ふふ。彼女とあなた、どちらがより私を喜ばせられる悲鳴を上げられるか」  
（だめ！ それだけは……！）

ライーサは、必死でアンジュへと視線で「逃げろ」という意志を伝える。同時に何とか立ち上がろうと、必死に手を壁に付き、足に力を込めた。

「さあ、か弱き者よ」

プローセナが再び、あの魔力の暗黒球を掌へと出現させた。続いて、紫の瞳がかつと照り輝く。

「佳<sup>よ</sup>い声で泣いてみせてくださいな……！」

声と同時に魔力の塊が、今度はアンジュへと向かって撃ち放たれた。アンジュが短い悲鳴を上げ、セバスタが、彼女を衝撃波から守ろうと、その前に躍り出る。

（……だめ！）

ライーサはどうやって自分が瞬間移動の術を使ったのか、良く分からなかった。ただ、いつの間にか。いつの間にかライーサは、アンジュとセバスタを庇うようにして、そこに立っていた。己の背中を盾にしたライーサを、たちまち闇の大渦が飲み込む。ライーサは壁に付いた掌を握りしめ、その苦痛に耐えた。万力で身体のうちこちを締め上げられるような感覚と、皮膚が焼ける激痛が背中全体に広がった。

やがて、強力な闇の奔流が力を失い、その身体の上を過ぎ去った時。アンジュがライーサの顔を見上げ……次の瞬間、目を見張って声を失う。セバスタも同様だった。

「だ……」

そんな彼女たちを前に、ライーサは辛うじて、声を絞り出した。

「大丈夫……?」

小さくつぶやくと同時に、ずりりとその身体は床へと倒れ込んでしまう。

「ライーサッ！」

「ライーサ様！」

二人の悲痛な声が、ライーサの耳朶を打つ。

「平気よ……このくらい」

ライーサはほぼ無意識に声を発していた。その細い指が、アンジュの頬を伝う涙を拭う。

「だって、平気なわけが……！」

アンジュの声を無視し、ライーサは何とか身を起こそうとした。アンジュが止めようとするが、ライーサは無理やり身体を動かす。その目はただ、階上のプローセナだけを見据えている。

「……あなたの『わだつみの声』は、私が絶対に取り戻すわ」

ライーサはアンジュへ確固たる意志を込めて言った。その決意を顕あわにした声に、アンジュが驚いたように言葉を失う。

「……ほう。もう終わりかと思いましたがよ、『夜を盗むもの』」

冷徹な笑みを浮かべた、プローセナの声が降ってくる。

ライーサは壮絶な痛みを、杖を握りしめ奥歯を噛んで耐え忍びつつ、再び身体を起こす。正直、立ち上がっているだけで精一杯だった。それでも。

それでも。

強くあらねば。

プローセナがさも愉快そうな笑みとともに、よく響く声で叫んだ。

「佳い、佳いわ……！ さあ、私をもっと楽しませて！ そしてその強い芯が折れた時に出る絶望の声を、たっぷり聞かせてくださいな……！」

彼女は哄笑して再び掌の上に、暗黒球を出現させた。

「さあ！ 心地よい悲鳴を！」

ライーサは杖を握りしめる。後ろ背にはセバスタとアンジュ。ライーサは二人を背にして、全力でその呪文を唱え始める。続いて、プローセナを中心に風が勢い良く巻き起こった。

ライーサは息を吸い込む。——強くあらねば。

——『ライーサ、あなたにはね』

母の言葉が、ライーサの脳裏に浮かぶ。

——『優しい心を持って生きて欲しいの』

いつだって優しくかった母。

——『強く生きなさい』

父の言葉。本当に最後の最後にだけ、一度限りのみ、ライーサに向かって微笑んだその表情と強い意志を込めた瞳。

そう、強くあらねば。

プローセナの魔力が、またも黒き衝撃波となりライーサへと向かってくる。ライーサはその衝撃波の向こうの敵に向かって、最後の力を振り絞り、喉が割れんばかりに呪文を叫んだ。

「ライーサ、イーサ！ プラナス！ イクシア！」

そう、強くあらねば。

母や父との約束さえも。

……守れない。

「ローゼリアッ！」

あの地下書庫で学び、命を削るほどの魔力を犠牲にして身に付けた、母親譲りの最大最強の呪文。それを大きく叫んだ瞬間。

誰かが……たくさんの誰かが……、一緒にライーサの杖を握ってくれたような。そんな気がした。

途端。

杖の先から雷よりも激しい光が発射された。プローセナのまとう闇の衣が、一瞬にしてその激しい光の洪水の中で消し飛ぶ。暗黒球に凝縮した闇の衝撃波すらも、それに押し負けて一気にプローセナの方へと逆流する。

「何っ!？」

思ってもみなかった反撃に、プローセナが驚きの声を上げる。瞬間、ライーサの心をかすかな疑念がよぎる。いくら闇の魔女とはいえ、この呪文の力に対抗できるのだろうか……？

もはやその母譲りの呪文は、ライーサの制御できる範囲すら超え、純粋な破壊

の力と成り果てているかのようにも感じられた。

(もしかしたら……あの人、プローセナの命をも奪ってしまう……!?)

それはライーサの望まない結末だった。しかし……プローセナの身体にその光の波動が届きかけた瞬間、黒い影が横合いから突如飛び込んできた。

ライーサがその正体を認識する暇もなく。その影は、腕を振りかざしただけで、ライーサの手にすら余るその魔力の波動を、一瞬で打ち消してしまう。

(えっ……!?)

ライーサはもちろん、結果的に救われた形となったプローセナすら、しばし茫然としてその影を見つめた。

「……遊びが過ぎたわね、プローセナ」

バストリアの魔術師風のフードを被っていたその人影が、そう言ってプローセナを振り返る。そして……頭に手をかけ、さっとフードを脱ぎ去った。

炎のかげらを宿したかのような、やや赤みがかった髪。やわらかく、それでいて限り無く深い知性を宿した瞳。ローブの外からも分かる、豊満な肉体とあふれん

ばかりの色気。

「……ヴァ、ヴァイヤ！」

プローセナは、この上なく驚いた様子で、その名を口にした。

「ヴァイヤ……!？」

ライーサは思わずその名をおうむ返しにし、同時に確かにその姿が、噂に聞く容貌そのものであることに気づき、あぜん啞然となる。

「『闇の全知者ヴァイヤ』！ なぜあなたが私の館に現れるのっ!」

プローセナがヴァイヤに向かって、不機嫌そうに、だがどこか震えを含んだ声で叫ぶ。

「あら、助けてあげたのに随分な言いようね、プローセナ。さすがにあの力を前にしては、あなたであつても無事ですまなかつたでしょうに」

くすりとした笑いとともに、あくまで冷静さを失わないヴァイヤの声が響く。プローセナはその言葉に、う、と小さくうめいて口を閉ざす。この場の主たる威厳が、今は完全にプローセナからヴァイヤ移ってしまったようでもあった。

ヴァイヤが優雅に首を傾げ、なおもプローセナへ言葉をかける。

「あなた、『わたつみの秘宝』なんてものを持っているんですって？」

「……それが、どうしたの」

プローセナはどこか拗ねたような声で、ヴァイヤから目を逸らす。

「闇の魔女たるあなたには、そんなもの、たいして入り用でもないでしょう？」

そんな意地悪ばかりしていないで、返してあげなさいよ」

「な……っ！」

プローセナはヴァイヤの台詞に憤慨した様子で声を上げる。ライーサとアンジュも、予期せぬ言葉に目を丸くした。

「な、なぜ、一度私の物になった宝を、あんな小娘たちに渡してやらなくちゃいけないのっ？ 私の物は私の……」

「今回はあなたの負けよ、プローセナ」

まるで分厚い城壁でさえぎるかのように、プローセナの言葉を、ヴァイヤが静かに制した。そのまま、彼女は優しい口調で続ける。

「あなたは遊びのつもりだったみたいだけど、本物の才能を前にすれば、それが大火傷につながることもある。ひとまず、勝負はここまでよ。ここから先は、この私……『闇の全知者ヴァイヤ』が預かるわ」

「で、でも……」

「不満があるなら……そうね、今度は私がお相手してあげてもいいのよ？」

ヴァイヤの静かな言葉に、プローセナはついに視線を下に落とし、口をつぐんだ。

そしてくるとライーサたちに背を向けると、掌の上に小さな闇の渦を作り出し、さきほど飲み込ませた青い宝玉と黄金で作られた首飾りを出現させた。

プローセナはそれを細い指で掴むと、階下で立ち尽くしていたライーサへと、まるで興味など最初から無かったかのように放り投げた。

ライーサは空を舞った『秘宝』を、慌てて両手で受け留める。彼女の手の中で、『秘宝』の青い宝石と、無数の金の装飾がきらきらときらめいた。

「……さつさと私の館を出ておいき。そして、二度とこの闇の森に近づかないで

……！」

そう言い捨てて、プローセナは再び闇の衣をまとい、小さく呪文を唱える。同時にその姿は霧のように薄まり、やがて完全に館の闇の中へと溶け込んでしまった。それを確認するや否や、ヴァイヤもライーサたちの方を振り返る。そして、妖艶に微笑んで見せると、彼女もまた、すつとローブをひるがえ翻す。次の瞬間、すでに広間からヴァイヤの姿は消えていた。

「ライーサ！」

「ライーサ様！」

アンジュとセバスタが背後からライーサへと近寄ってくる。ライーサは、満面の笑みを浮かべて『秘宝』を手に振り返った。

身体中が痛かった。でも。

ライーサは心内で思う。

でも、私にも、『守れた』。

（——約束、守れたよ）

アンジュとセバスタの笑顔に笑顔で返しながら、ライーサは、先ほど一緒に杖を握ってくれた『誰か』に、……父や母、そして親族らに、静かに報告したのだ。った。

※※※

闇色に閉ざされた、長い長い隠し通路の途中。『常闇の館』の奥の奥にある、プローセナの『私室』へと彼女が歩を進めていた時。ふと、聞き覚えのある声が降ってきた。

「ずいぶんとご機嫌ななめね」

「……ヴァイヤ。まだ何か用があるというの？」

プローセナは美しい眉をしかめ、吐き捨てるように言う。

「さつきはごめんなさい……あなた、本当はあの秘宝、盗んだわけではなかったのでしょう？」

どこから語りかけているのか、ヴァイヤのやわらかい声が彼女に降りかかってくる。その声に、わずらわしようにプローセナが短く答える。

「……実質的には、私が盗んだも同じです」

そんな彼女に、ヴァイヤの声は、ふふ、と優雅に笑って、「嘘をついてもだめよ」と返してきた。

「私に偽りが通じないことは百も承知でしょう、プローセナ。それにしても、あなたやっぱり、女性らしいところを持っているのね」

「うるさいわね……!」

プローセナはどこか悔しそうな顔をして、唇を噛む。

「あなたが目を付けた中で、唯一心を奪えないでいる男……確か、ギルスティンとかいう者だっけ？ やれやれ、まったく小粋な贈り物じゃないの。まあ少々、荒っぽい盗賊流のやり口だったとは言え、ね」

「……」

もうこれ以上は何を言っても、己の心の内を無様に晒す<sup>さら</sup>ただけだと悟ったのだろ

う。黙り込んでしまったプローセナをからかうかのように、ヴァイヤの声が続ける。

「あら、やっぱり凶星かしら。『常闇の魔女』とはいえ、気に入った殿方からの贈り物は、やっぱり大事にしたいのね」

「決まっていますわ。私も、女ですもの……」

どこまでも強く、しかしどこか寂しげにつぶやいて、プローセナは闇の通路の先にある扉を呪文とともに開き、その中——彼女の私室へと消えた。

一方、こちらでもまたどこも知れぬ暗い小部屋の中、机の上に置かれた黒い水晶球の向こう……魔力による幻視でその姿を見送ったヴァイヤは、まるで自嘲するかのように微笑んで、そつとつぶやく。

「ふふ、心を縛れない殿方には苦勞させられるわね、お互いに……」

彼女はそつと目を閉じ、水晶球の中の幻像をひとなでして消し去る。その後、彼女の視線はふと、小部屋の片隅の鏡台の上に落ちた。そこには小さな銀色の指輪が置かれている。

かすかに光るその指輪。その銀色のアームには、消えかかったかすかな金文字で「ゲオルグ・フォル・イーサード」……ライーサの父が、天才魔術師として名を馳せた若き頃の名が、刻まれていた。

「いつの時代かどの分岐世界か、この国の闇の中に点った、小さな魂の炎の後始末……」

そう言いながら、彼女はふと笑顔を見せる。

「まあ、あの方にはおよびもつかないけれど……一度、受け取っちゃった以上はね。ふふ、私らしくもなかったかしら」

彼女はそうつぶやくと、その白い指で、銀色の指輪をそつと取り上げる。そのつややかな唇に冷たい銀の感触を押し当てると、ヴァイヤは薄暗い闇の中、再び妖艶に笑った。そして、ふと静かに目を閉じると、わずかな詠唱とともに暖炉に極熱の白炎を呼び出す。そして彼女は、その白炎の中へ、指輪を優しく投じた。燃え盛る炎の中、たちまち溶解していく古い指輪……それとともに、彼女の中で無数の世界の中から読み出された、古くて新しい運命の分岐が一つ、静かに溶け

落ちる。それは、とある運命世界の中で、彼女がたどり得たはずの運命の一つの結実だった。

闇の全知者……運命の分岐世界すらも渡り歩く能力を持つがゆえに、彼女は本質的に矛盾した存在だ。その魂はあらゆる情欲の在り方とあらゆる恋の結末を知っており、同時にその身体は、何一つ世の穢れけがを知らない乙女そのものでもある。今、ヴァイアはそつと目を閉じ、心の中に灯った一つの想いに、改めて殉じることを誓う。そう、あらゆる運命と歴史が交錯するこの場所で、闇の全知者が真にその身と魂をゆだねる者は、ただ一人がいい。今、彼女が仕えるのは、この世界の絶対上位にあるザインの使徒の一人……いずれ定まる新たなアトランティカの主神の上にすら君臨する、究極絶対の運命神として、クロノグリフにその名を刻む者なのだから。

## 第五章

ライーサは『常闇の館』を後にすると、すぐに『秘宝』の首飾りをアンジュへと手渡した。

「はい。約束通り、『秘宝』は取り返したわよ」

差し出された『秘宝』の首飾りを受け取ったアンジュの翡翠色の瞳に、ふと涙が盛り上がり……たちまち抑えきれない奔流となつて溢れ出してくる。

「ほら、泣かないの」

ライーサがそつと肩に手を置いてやる。

「だって……だって、ライーサはそんなに傷だらけになつて……服もぼろぼろで……」

「……気にしないで。私は私のために動いただけだから」

「あ、ありがとう……、ありがとうございます、ライーサ……」

秘宝の首飾りをぎゅつと抱きしめ、涙を流しながら礼を述べるアンジュに、ライーサはこそばゆい気持ちになり、また、つい強がつてしまった。

「ふふん。私は天才魔術師で、稀代の怪盗なんだから。どうつてことないわよ」

本当は身体中が痛かったが、プローセナもさして本気を出していないかったのだらう、致命傷になるほどの傷は負っていないかった。骨も折れていないようだし、ゆっくり歩けば、街中のライーサの住処までは、何とか辿り着けるだろう。

依然泣き続けるアンジュと、おまけにもらい泣きを始めたセバスタの涙を、ライーサは掌てのひらでそっと拭ぬぐってやり「さあ」と、その腕を引いた。

「もう帰りましょう。イースラに戻った時には、きつとあなたの一族も喜ぶはずよ」

温かい言葉に、アンジュも泣き腫はらしていた顔に精いっぱいの笑みを浮かべて、「はいっ！」

と、元氣な声で答えた。二人が手をつなぎ、ゆっくりと歩き出した瞬間。ぞくり、とライーサの背筋を冷たいものが走り抜ける。突然襲ってきたその『殺意』は、ライーサの身体を無意識に突き動かした。

「危ないッ！」

ライーサは咄嗟とつさにアンジュを庇かばって、地面に倒れ伏した。

しかし唐突に飛来した悪意の牙は避けきれず、ライーサの肩に一筋の鮮血が散る。

「……ちつ」

小道の脇に生い茂った茂みの方から、舌打ちの声。

「あと少しで……お宝と一緒に、お前の屍が手に入れられたのによ」

嫌らしいしわがれ声。その独特な声とともに茂みから姿を現した影は、歪んだ角灯かんとらを手にしている。もう片方の手には、オーク族の猟師が使う、狩猟用の吹き矢を携えていた。

「グッコ……」

ライーサは、闇の森からゆらりと姿を現した、凶相のオークの名前をつぶやいた。グッコはその顔をさらに歪め、荒々しく叫んだ。

「へっ……この前のこと、忘れたとは言ねえぞ！ てめえはこの俺を愚弄した上、大恥をかかせやがったツ！ 例えお前が忘れようが、俺は絶対に忘れねえ！」

「……あの時はすまなかつたわ。でも、私の占いの結果が捻じ曲げられたのは、

プローセナの干渉の結果だったの」

「……ふん」

一応、事情を伝えようとするライーサに向け、グッコは小さく鼻を鳴らした。

「そもそもあなたと一戦交えることになったのは、そちらにも責任があるでしょう。あなたが機会に乗じて私たちを騙して、ひと稼ぎしようともくろんだんだから……」

だが、グッコは黙ったまま、憎悪に満ちた視線をこちらに向けてくるだけだ。その時、ふとライーサは気づく。……恐らく、今のグッコには何を言っても通じないのだ。そもそもプローセナの館があるこの森までやってきて、秘宝を取り戻したライーサたちを見ている以上、彼自身もある程度、裏の事情について察しているもおかしくないはずだ。けれど彼の力では、プローセナを相手にして、かなうはずがない。だからこそ、より相手にしやすいライーサたちに、怒りと鬱憤うっぷんの矛先を向けてきたのではないだろうか？

果たして、彼は次の瞬間、沈黙を破って声を上げた。

「御託を並べるんじゃないわねえ！ プロローセナがどうかは、この際、もう関係ねえんだ！ さあ、お前も俺の下僕にしてやるッ！」

ライーサは初めて、彼の表情を静かな心で見つめた。よく見ると、彼は憎悪で顔を歪めると同時に、ひどく傷ついたような表情をしていた。プロローセナの悪<sup>いたずら</sup>戯めいた悪意の対象にされ、バストリアのあらゆる人々、存在に忌み嫌われ、何度も何度も憎しみと嫌悪の感情をぶつけられてきた一匹のオーク。心を持たぬ冷たい屍たちだけを相手に、幼稚な権力欲と無限に尽きない金銭欲を満足させている……。

ライーサの心に、ふと憐れみに似た感情が浮かぶ。

「もう一度だけ、言う。あの時は悪かったわ。でも私たちも騙されていたの。あなたがどうしても、というのなら仕方がないわ。でも、そのことだけは分かっているほしいんだけど……」

だがライーサの声は、再びしわがれた怒鳴り声でさえぎられた。

「……知ったことか！ さあ、落とし前を付けてやるぜ！」

彼女はそつと杖を握り、グッコへと向き直った。……半ば、予想はしていたことだった。ライーサは目を閉じ、ため息を一つ吐き出すと、アンジュをかばうようにして、戦う体勢に入る。グッコは憤りの表情のまま地面に勢いよく手を付き、呪文を口の中で唱えた。

「来やがれ！ 下僕どもッ！」

グッコが憎悪を剥き出しにしたような声を上げる。たちまちそこかしの地面がぼこぼここと盛り上がり、屍たちが次々と地面から姿を現した。やむを得ず、ライーサが杖を振りかざし、以前と同じように呪文を唱えようとした時だった。

「あぐつ……!!」

唐突に、ライーサの身体全体に痛みが走った。あまりの激痛に、ライーサは声を詰まらせて身体をよろめかせてしまう。がくん、と足の力が抜け、地面に膝が付いた。

「ライーサ！」

「ライーサ様！」

アンジュとセバスタが、驚きとともに悲痛な声を上げる。

「へへへ。ようやく効いてきやがったようだな……」

グッコがにやりと笑った。

「あなた、何を……!？」

「おかしいと思わなかったのかよ？ 俺様がのこのこ標的の前に姿を現して、時間稼いでたわけがよ」

グッコは唇を歪めると、ゆらゆらと手にしていた吹き矢の筒を振って見せる。

（しまった……!! 矢に毒を……!!）

オークの猟師の中には、好んで毒矢を使う者がいるという。毒草を煮詰めたそれは、かすかな傷でも、確実に獲物を動けなくしてしまうのだと、いつか書物で読んだことがあった。ライーサはかすむ視界の中で、己のうかつさに思わず唇を噛んだ。

「さて、最後の仕上げといくかな」

同時にグッコが舌なめずりをして、大声で吠える。

「それ、やっちゃまえッ!!」

忌まわしい下僕たちがゆらゆらと動き、今にもライーサに襲いかかろうと体勢を整えた。思わずライーサが目を閉じたその時。不意に飛び出した誰かが両手を広げ、屍たちとライーサの間に立ちふさがった。その人影……アンジユは、驚きに目を丸くするライーサの前で、静かに息を吸い込むと、しっかりと目を閉じる。グッコを含め、誰もが驚き息を飲んだ次の瞬間、森の中に響き渡ったのは、透き通った歌声だった。

それはこの上なく優しく、どこか物悲しさをたたえた美声だった。グッコですら怒りを忘れ、思わず聴き惚れてしまったほどに……。屍の下僕たちは、その歌声の魔力に屈して動きを止め、次にはざらざらとその身体を灰に変えて、姿を消滅させてしまった。

「わたくしの『わだつみの声』は、大いなる魔力を宿す歌声……この『郷愁の歌』の前には、呪われた魂さえも心動かされ、在るべき地に還るのです」

アンジユが静かにグッコへ言い放った。その声は、ライーサの記憶の中にある

ような、あのか弱い少女のものではない。それは凜として響き渡る、確たる意志と芯が通ったものだった。

まるで、その首に掛けられた青い宝石の、荘厳なきらめきをそのまま宿したような……。

「あ、あなた……」

ライーサが地面に膝を付いたまま、アンジュの後ろ姿を見上げると、アンジュは黒く真つ直ぐな髪をなびかせながら、振り返る。

「わたくしにお任せください、ライーサ」

今度は彼女が、につこりと笑う番だった。そしてアンジュがさらに別の旋律を歌い始めると、たちまちライーサの身体から、吹き矢によって流し込まれた毒が霧となって抜け去っていく。人魚族に伝わる『平癒へいゆの歌』を歌い終えた後、アンジュはグッコをその翡翠色の瞳で、強く見据える。

「グッコさん、わたくしの『わだつみの声』の前には、あなたの屍術はすでに無力……。大人しく身をお引きください」

「ぐっ……」

グッコが小さくうめくと同時に若干のたじろぎを見せ、後ずさった。

しかし。

「……へッ」

グッコが不意に自棄になったような声を上げる。

「こうなったら仕方がねえ！ こいつが最後のとっておきだッ！」

グッコがこれまでとは違った奇妙な呪文を唱えると、彼の周囲に青い炎がふたつ、ゆらりと揺らめいた。

「……今度の下僕は、ただの屍じゃねえ。この世に未練を抱いて死んだ、迷える魂そのものだぜ」

「まだ分からないのですか？ 強い意志を持つ確固たる存在ならともかく、屍や幽鬼にかりそめの魂を与えて使役しようというなら、いずれにしても同じ事ですよ」

アンジュが再び『わだつみの声』を発しようと思いを吸い込んだ、その時。

ライーサは思わず息を飲み、目を大きく見開いて身を固まらせてしまった。それはセバスタも同様だった。

「待……つて……」

ライーサは震える声で、アンジュへ言葉をかけた。

「ライーサ……？」

そのか細過ぎる声に、アンジュが若干驚いたような様子で、背後のライーサを振り返った。だがライーサはそんなアンジュの方を見ようともせず、現れた亡霊たちの姿を、茫然とした顔で凝視していた。

青ざめた顔のその亡霊たちは。そこにいたのは。

「お……お父様……、お母様……」

そこに佇んでいたのは、ライーサの父と母。ゲオルグとエリーゼだったのだ。あの日、ライーサの誕生日のために着飾った、そのままの姿で……。

グッコが下卑た笑いを浮かべ、嘲笑するように言った。

「どうだい、『夜を盗むもの』。闇市場で手に入れたとびきりの死霊術……『ソウ

ルスポイル』の巻物を使った術だ。ちつと値は張ったが、たいした代物だろ？

お前のことは調べさせてもらったからな……ちよいとあの館の焼け跡と近くの森で儀式を行って、お前と渡り合うのにぴったりの下僕を仕入れてきたのさ」

グッコはおかしそうに笑い声を上げて、すでにぼんやりとした形を持ったライーサの母の手を取り、まるで人形に手を振らせるかのように、ひらひらと操って見せた。母は意志もない様子で、グッコのされるがままになっている。父も押し黙って、じつとそこに突っ立ったままだ。その光景に、ライーサの頭の中が真っ白になる。やがて視界が歪み、身体がかしぐ。

「ライーサ……!!」

アンジュが思わずその身体を抱き留めようと、手を伸ばした。すかさずグッコが叫ぶ。

「今だッ！ 行け！」

同時に、ふわりとドレスをはためかせながら、まずはライーサの母の亡霊が一気に跳躍した。懐かしい母が、唇の端から血を流し、凄惨な笑みを浮かべたまま、

ライーサの目と鼻の先に迫りくる。あつという間もなく、母の掌が優しくライーサの頬を包み込んだ。亡霊の掌は、生者の生命力を吸い取ってしまうという。そうと知りつつも、身体が言うことを聞かない。

(抵抗、できない……)

ライーサの手から、杖がするりと滑り落ちた。隣でアンジュが、セバスタが、ライーサの名を呼ぶ。その声がやけに遠く、夢の中のもののように聞こえた。同時にライーサは、己の思考がすでに自分のものでなくなっているのを感じ取った。母に会えた。もう二度と会えないと思っていた、愛しい……愛しい愛しい、母に。

「お母……様……」

いつしか頬に涙を伝わせて、ライーサは冷たい母の首に腕を回す。だが。愛しい母にすぎり、幼な子の自分に還って発せられた声は。腹に何かが押し込まれる奇妙な感触と、ぬるりとした液体の温かさによって、さえぎられた。

「え……？」

ライーサの唇から思わず声が漏れた。黒い衣装に包まれたその腹部に……いつのまに迫ったのか、父の亡霊が携えた短剣が、深々と突き刺さっていたのだった。

「嫌ああ！ ライーサ！ ライーサああッ！」

少女の悲鳴に、ライーサはようやくやく霨がかかったようだった意識を取り戻す。虚ろな目で声のした方を見ると、少女が凶相のオークに捕まって暴れている姿が目に入った。その少女を守ろうとして一蹴されたのだろう、ぐったりとしたセバスタも一緒だ。セバスタのひよろりとした尾をつかみ上げているオークの手には、一緒にきらきらと光る首飾りの姿もあった。

(アンジュ……！)

ライーサは、目に大粒の涙を溜め、声を張り上げて己を呼ぶ少女の名前を、やっと思い出す。同時に真っ白だった世界に色がつき、激痛とともに、意識が鮮明になっていく。心臓の鼓動と合わせるように、痛みが身体中を駆け回る。そして、目の前の母の屍が愛おしそうに口を開いた。

「ライーサ……」

しかし今は、その母の声がどこか作り物めいて聞こえる。再び、アンジュが自分の名を呼んだ。

（私、行かなきゃ……！）

ライーサは目をつむり、唇を噛みしめて、目の前の愛しい死者に、精いっぱい謝罪の言葉を声にならない声で伝えた。同時に、胸が苦痛と贖罪しんぐさいの念でいっぱいになる。

アンジュのライーサを呼ぶ声が三度、暗い森に響く。グッコがその身体を地面へ乱暴に押し倒し『わだつみの声』を殺すために、その首を怪力で締め上げようとす。

出血がひどく、思考がかすむ。いつの間にか、魔力の杖は遠くへ転がってしまっている。

（ああ……）

ライーサは唇を噛んだ。

——最早、あの呪文を使うしかない。

目の前の母の亡霊が、そつと顔をライーサへ向けている。父の亡霊も短剣から手を放し、無言でライーサの顔をのぞきこんでいる。その顔は冷たく無表情だったが、今のライーサには、それが再会の嬉しさと無慈悲な運命に対する哀しみが入り混じった、泣き笑いの表情にも見えた。

ライーサは胸が張り裂けそうになるのを必死にこらえながら、ポケットから一つの指輪を取り出した。どこかで意識を取り戻したららしいセバスタの声がする。そう、セバスタは知っているのだ……この指輪のことを。だが、ライーサはごめんね、と一言、心の中で謝ることしかできなかった。そうしてからそつと、その指輪に口づけを落とす。

ライーサは、息を吸い込んだ。

「ライーサ、イーサ……!!」

取り出した指輪が光を放つ。その強さに驚いて、グッコがアンジュの細い首を締め上げる、腕の力を緩めた。

そしてライーサはついに、その呪文を……。いつか母が唱えた呪文を、彼女が

光の渦の中に消えた後、地面に転がっていたあの指輪とともに叫んだ。

「テイオラ、ピエリス、グラディオラスッ！」

その途端、指輪が強烈な閃光を放ち、暗闇が支配していた森の中を、白い輝きの爆発で包み込んだ。

グッコが上げる絶叫が聞こえる。目の前の母の姿が、その隣の父の身体が、真っ白く染まった世界の中で、ばらばらに砕けて四散していくのが、ぼんやりとライーサの目に映る。その最後の姿を見たくなくて、ライーサは目を強く閉じた。だが……その刹那、やわらかい複数の掌が、頭を優しく撫でていく感覚を、ライーサは微かに感じ取った。

光の洪水が止み、ライーサが目を開いた時。周囲には静けさと、倒れ伏すアンジュとセバスタ、そして地面をのたうち回るグッコの姿だけがあった。

グッコは咄嗟とつぱに闇の防御魔術を使ったらしいが、それでも呪文の威力を、多少軽減できたに過ぎないようだった。ぼろぼろの着衣は焼け焦げ、光に灼かれた目を押さえて、痛みにうめきつつ地面を転げまわっている。

「畜生、畜生!! 一体何を……何をしやがったんだッ!」

ライーサはまだ出血が止まらない横腹を押えると、最後の力を振り絞って、グッコに言い放った。

「私の母親譲りの、最後の秘術よ。完全に成功とはいかなかったけれど、闇の術によって作られた下僕はもちろん、術者すらも消滅させるほどの力があるわ。グッコ、あなた、自分の行いを少しは悔い改めなさい」

ライーサが近くに転がっていた魔杖と、グッコが取り落とした首飾りを拾い上げる。そして彼女は、地面に這いつくばるグッコへ杖の先を向けた。その気配を敏感に感じ取ったのか、グッコは「ひい」と情けない声を上げる。

「……どうする? もう一度、今度は完全な状態で、さっきの秘術を唱えてもいいのよ。二度と私たちに手出しをしないと約束するか、それともこの世界から完全に消え去りたいか……あなたに、選ばせてあげる」

ライーサは必死で意識をつなぎとめつつ、グッコに言い放つ。あらんかぎりの威厳と冷徹さを含ませた声色で。グッコはそれを聞くと完全に顔を青白くして、

「わかった！ わかったから見逃してくれ！」と、泣き声を上げて後ずさった。

「なら、行きなさい……！」

ライーサが漂わせる、まるで魔術師一族の当主を思わせるかのような威圧感。グッコはそれに怯え、後ずさりながら、森の奥へと逃げ去っていったのだった。

※※※

「ライーサ！」

アンジュが、心配そうな、それでいて少し安堵したかのような複雑な表情で、ライーサの元へと駆け寄ってきた。

「無事ね？ 良かった……！」

ライーサはその顔に微笑みを返す。

「ライーサ！ 怪我は大丈夫ですか！ 今すぐ手当てを……！」

「……いいの」

不意に、ライーサの身体が崩れ落ちた。手近な木の幹に上半身を預けるも、すぐに倒れてしまいそうになる。慌てて取りすぎるアンジュを、ライーサは静かに制した。傷の痛みなど、もう些細な問題でしかない。

「ライーサ……？」

思いがけない静けさをたたえたその様子に、アンジュが怯えたように短く名を呼んだ。そして彼女は、すぐに状況を察したようだった。ライーサはその白く綺麗な、もう涙に濡れはじめた泣き虫の顔に向け、かすかに微笑む。

——まったく、もう。

まったく……この少女は今度はいつになったら泣き止むのだろう、などと思いつながら。

ライーサは、本当に最後の力を振り絞ると、無理やりに笑顔を作ってから一言だけ、小さくつぶやいた。

「……ごめんね」

同時に、力尽きた身体は、ついに完全に地面へと倒れ伏してしまう。

「ライーサ様！ ライーサ様ああ！」

セバスタが、動かなくなってしまった主の名前を呼んで泣きわめいた。アンジュはあまりのことに茫然<sup>ぼうぜん</sup>としていたが、ふと気を取り直すと、セバスタ同様、必死でライーサの名を呼びはじめる。続いてその身体に取りすがり、必死で声をかけ続けた。

だが、返事はなかった。その身体から、すでに温もりは失われはじめていた。今、冷たくなりつつある一人の少女の頬の上に、もう一人の少女が流す熱い涙の雫がぱたぱたと落ちた。

……いつしか。いつしかアンジュは、その首飾りの青い宝石を、祈るように両の手で握り込んでいた。そして、文字通り全てを投げ出して、祈りの言葉を紡ぐ。「海原を統べる大神……大いなる水の精霊神、エン・ハよ……どうかわたくしに、力なきわたくしに、お力を……！ 一度限りで良いのです……、どうかどうか、わたくしに、奇跡の力をお授けください……！」

アンジュは唐突に思い付いたように、首飾りから青い宝石を力任せにむしり取

った。それからもう一度、ライーサの手を取る。力を失った白い手に、一緒に青い石を握り込むようにして。

やがて、静かにアンジュの唇から声が漏れはじめた。『郷愁の歌』に似ているが、それともまた異なる旋律を持った歌声。それは次第に調子を整えられながら、海の波を思わせるような一定の旋律を刻みはじめる。丸い身体を小さくしぼませた使い魔と月明かりだけがひっそりと見守る中……わだつみの声を持つ歌姫は頬に涙を伝わせ、バストリアの少女のために、祈りとともに歌声を響かせる。その声は、闇の森の中に朗々と響き渡り、周囲の木々、いや、天の星々ですらも、その玉声に聞き惚れているかのようだった……。

どれくらい、そうしていただろうか。一陣の風がアンジュとライーサの髪をなびかせた。

ふと、掌中の石が、不思議な熱を持っていることにアンジュは気づく。

そつと掌を開いた途端……まるで藍の染料壺を横倒したかのように、周囲が一面の青い霧と光に包まれていく。アンジュは驚愕きょうがくして座り込み、セバスタも同様

に慌てて周囲を見渡ししている。やがて光の中から、幻のように遠いかすかな声が、アンジュの耳に届いた。

「わらわを喚んだのは、そなたですか……？」

その声の方を見ると、そこには青い肌に不思議な色の瞳をした、美しい女性の姿がある。髪の毛までも深い藍色をしたその女性は、ふわりと空中に漂っていた。周囲に満ちた青い霧と光のせいで、アンジュはまるで、自分が海中にいるかのような錯覚を覚えた。

アンジュが驚きで声をなくしていると、その女性の姿をした精霊は、優しい声で再び呼びかけてきた。

「わらわは、エン・ハの使いたる海原の精霊……今一度、問いましょう。『寿ことほぎの歌』、『平癒へいゆの歌』、そして『郷愁の歌』に続く『魂たま送りの歌』で、わらわを喚んだのはそなたですね？」

アンジュは驚きで、今度こそ声も出なくなつた。確かにさきほどの歌……『魂送りの歌』は、そういった意味合いを持つものだと聞いたことがある。それはい

つかアンジュが母親に習ったもので、本来は死者の魂を悼むための歌なのだ、と記憶の中で母は語っていた。「もしかするといつか、死んでしまった人の魂が戻ってくるかもしれない……そんなことを願って、みんなこの歌を歌うのよ。私たちにはみな、還る場所があるのだから」。そう語る母の声。アンジュはその時に感じた不思議な安心感を思い出しながら、一縷の望みと祈りを託して、それを歌い続けたのだった。だが、まさか、本当にこんなことが起ころうとは……！

「エン・ハが伝えし古き魔力を秘めた四つの歌……それを見事に歌い上げし者よ。そなたは願いを請うための証を示しました。さあ、願いを言いなさい。それがわらわの力が及ぶものである限り、一つだけそれを叶えましょう……」

精霊はそう言つて、アンジュを促す。

「ね、願ひ……?」

アンジュはようやく気を取り直して、小さくつぶやいた。次の瞬間、頭の中で閃光のようにひらめいたことがある。

「あ、あなたが真に海原の精霊であるというなら……『魂の帰還』の法術が使え

るはずですわね!？」

それも、いつか母が語ってくれた伝承の一つでしかない。だが今、それが本当のことであってほしいと、アンジュは強く強く願った。果たして。

「……まだ、倒れて日が浅い勇氣ある者の魂ならば。わらわは、あらゆる魂が還る場所に通じる道を司るゆえに」

精霊が微笑みながら、そつとうなづく。たちまちアンジュは飛び上がるようにして、すぐさま次の言葉を口にしました。

「ラ、ライーサの……ッ！　ここに眠るわたくしの恩人……勇氣ある魔術師にして盗賊、ライーサの魂を還してください……ッ！　どうか、どうかお願いします……ッ！」

アンジュは、ついには精霊の前に手を付いて、頭を下げて懇願こんがんした。海原の精霊はそんなアンジュに向け、静かに口を開いた。

「承知しました。ただ、わらわはエン・ハとの契りによって、そなたら海の民を一度だけ助けるため、この『わだつみの秘宝』に宿りし精霊……その力は、一度

限りしか使えません。そしてわらわが去りし後、この秘石は魔力を失いたただの石になってしまいます。それでもかまわないのですか？」

「はい、かまいません」

アンジュは精霊の瞳を見つめ、きつぱりと言い切る。精霊はそのアンジュの言葉を聞き、「ならば」とうなづき、横たわるライーサのそばに漂い寄っていく。次いで、その青い頬をそつと冷たくなった少女の元に寄せた。

「この者の名は……『ライーサ』。さあ、今からその魂を、この亡骸の元へ呼び戻しましょう」

静かに精霊の唇が、ライーサの額へと触れた。

その途端、青い光と霧のように細かい水の飛沫が、再び周囲を包み込む。やがて周囲からその光と霧が消え去った時、精霊の姿はすでになく、今はもうただの首飾りと青い石に分断された『わだつみの秘宝』だけが、地面の上に残されていた。

そして……横たわるライーサの顔を、アンジュは恐る恐る覗き込む。

「ライーサ……？」

アンジュは胸を祈りでいっぱいにして、目をつむっている少女の名を呼んだ。すると、その呼びかけに応えるかのように。まるで今、微睡みまじろみから覚めたばかりのような緩やかな動きで。

ライーサの瞼が……開いた。

アンジュは両手で口を覆い、涙で顔をくしゃくしゃにした。そばではセバスタも、むせび泣きながらライーサの名を呼んだ。

そして……ライーサはアンジュをぼんやりした瞳で見上げ、そっと微笑むと言ったのだった。

「また、泣いてる……あなたは、本当に泣き虫ね」

## 終章

……蒼き皇国、マジュラ沖の遥はるか彼方、バストリアのとある海辺。夜の砂浜を

覆う満月の光の下、一つの影が、すつと波打ち際の岩の上で立ち上がった。今夜も遠くから聞こえてくるかすかな声に、その人影はじつと耳をかたむけていたのだ。

「そろそろ行こうか、セバスタ」

ライーサは隣にいるお供に、静かに声をかける。

「でも、ライーサ様……よろしいのですか？」

気遣わしげな視線を寄こすセバスタに、ライーサは軽く笑いかける。

「だって、仕方ないじゃない」

そう、バストリアは闇と魔の統べる神無き地、イースラは青く清浄なる神秘の皇国。二つが交わることは、通常の理の下では決してあり得ない。

「……でも、これではあまりに」

ライーサ様がお可哀想で、と涙ぐむ従者の頬をそつとマントの端で拭いてやりながら、ライーサは言う。

「大丈夫よ。だって、約束、したもの」

にっこり笑うと同時に、彼女はそっと目を閉じ、一つの光景を思い浮かべる。頭の中によぎる、イースラの姿。その世界は、夜でも深い青に彩られている。海の群青がより深くなり、月が蒼い光を地上に投げかける。その間をすり抜ける冷たい風も、まるで薄い藍色を含んでいるかのようだ。その青い夜風に乗せられて、月に染まった海岸から、この上なく美しい歌声が響いてくる。それは誰にも真似のできない『わだつみの声』。『秘宝』の力を失い、全てを捨てて大長に許しを請うた後……アンジュが誓いとともに己の技量だけで生み出した、真の『わだつみの歌』である。それは波音が弾け轟く大海原に、今日も静かに、けれど力強く歌い続けられる。その歌声は波の調べに乗せられて、遙かにどこまでも、どこまでも響いていくかのようであった。

そして同時に、あの日の光景がライーサの脳裏によみがえる。

※※※

「ライーサッ！」

イーストラの青い海面から顔を上げて、少女が息を切らしたようにその名を呼ぶ。ライーサが声のした方を振り返ると、まだ名残り惜しそうなアンジュが、すぐ傍かたわらにある海にかかった突堤の端から、上半身を覗のぞかせていた。

日光がちよっぴり苦手なセバスタは、今はシルクハットの中で眠りにについている。ライーサはしぶしぶといった様子で、アンジュのそばへ歩み寄った。それから彼女を海の中から見つめる美しい顔に視線を合わせるように、膝を折って屈み込む。

「ちよつと、もうお別れの挨拶は済ませたでしょ。それに、あまり大声で呼ばないですよ。私一応、盗賊やつてるんだから……」

若干呆れ気味な声に、アンジュはあつと口元を押え、その後、若干ためらい気味に言った。

「でも、ライーサ、わたくし、なんだか寂しく思えて……」

ライーサは、わざと呆れ顔のまま、そんなアンジュへ返す。

「そんなことないわ。だってもう、私の仕事は終わったんだから。『わだつみの秘宝』自体は取り戻せたわけだし、もう精霊がそこに宿っていないことなんて、あなたの一族の大長さえ説得できれば、誰にも分からないわよ」

そう言つて、ライーサはアンジュの胸元に輝くそれを見つめる。黄金の飾りと秘石に分断されていた首飾りは、意外に器用なセバスタの手により、今は元通りに修繕されている。見た目は、まったく以前と変わらないほどだ。

「確かに、あの四つの歌による儀式の事は、長い時間の中ですっかり忘れられていたようですが……」

「そうよ。しかもあなたほどの技量の持ち主は、そうそう出てくるものじゃない。だから偶然に四つの歌を一節の誤りもなく歌い上げちゃうなんてことも、まず起こらないはずよ。『秘宝』はそのまま、さらなる用心を重ねて、宝物蔵にでも安置されることになるでしょうね。だからあなたが自分からバストリアの者に関わる必要なんて、もうないわ」

「そんな……」

ライーサの若干冷めた物言いに、アンジュは言葉を詰まらせる。二人の間に、さざ波の音だけが響き渡った。

ややあつて、波音の合間に紛れて海鳥の声が響いた時、ライーサがふと口を開いた。

「それに故郷の海へ戻れば……あなたにも家族やお友達、たくさんいるはずだもの」

アンジュは唐突な言葉に一瞬目を瞬かせたが、すぐにライーサを見つめ、静かに答えた。

「いいえ」

その妙にはつきりとした物言いに、ライーサは少々驚き、うつむいてしまった。アンジュを見つめる。アンジュは下を向いたまま、そつと言った。

「本当のお友達なんて……一人もおりません。みんな、本当はわたくしの声を妬むか、わたくしの真の気持ちをも、分かってくれようとしないうばかりでした。家族の者もそうです。わたくしが『わだつみの秘宝』とともに声を失った時、みん

な、わたくしの声の心配ばかりで……」

アンジュは、海面から腕を伸ばし、ライーサの手にその掌てのひらを乗せた。

「本当の本当に命をかけて、わたくしの身を気遣ってくださったのは、ライーサが初めてでした」

海水に濡れたアンジュの掌が、ライーサの手を優しく掴つかむ。

「またわたくし、バストリアまで、ライーサに会いに行っても良いでしょうか……？」

アンジュは少し緊張が混じった声色で、そう申し出た。その翡翠色の瞳は、真っ直ぐにライーサを見つめている。ライーサはしかし、その目線を跳ね返すように、少し厳しい顔でぴしゃりと云ってのける。

「だめよ」

冷たい拒絶の言葉に、アンジュは隠し切れずに傷ついた様子を見せ………続いて「そう………ですか」とつぶやき、無理に笑って見せる。自分に余計な気を遣わせまいとするその健気さに胸を打たれながらも、心を鬼にしてライーサは続けた。

「そう……だめに決まってるでしょう。バストリアは『魔王国』と呼ばれている場所。あなたみたいな泣き虫がやってきたら、余計な危険に巻き込まれるだけよ。次は私が、あなたを助けられるとも限らないし……」

アンジュは黙ったまま動かない。その小さな肩は震えており、今にも泣き出しそうな様子だった。だから、ライーサは、めいっばいの勇気を振り絞って、言った。

「だから」

顔が赤くなる。声が震える。それらを精いっぱい努力で抑えつけて。

「だからさ……天才魔術師の私に変装して、このイースラへ、来てあげても、良いわよ。その……またお仕事があるなら、ね」

ライーサの言葉に、アンジュが目を丸くして顔を上げる。次の瞬間、彼女は顔を喜びに輝かせ、勢い込んで言った。

「ぜひ……ぜひ、いらしてください！ わたくし、歓迎いたしますっ！」

そのあまりの喜びように、ライーサはもう一つだけ、勇気を出してみることを

決める。

「その……」

「ライーサ？」

うなづいて黙りこくってしまったライーサの様子に、アンジュが不思議そうに首をかしげた。ライーサはひとつ深く息を吸って、アンジュへと申し出た。

「その……私、やっぱり……今度は、仕事とか依頼とかじゃなくなって……あなた  
の……と、友達として、イースラへ来ても、……良い、かしら……」

まるで消え入るような声。友達……女の子の友達なんて、ライーサには今まで一人としていなかった。友達と言えるのは、いつもお供のセバスタだけだったのだ。

さざ波の音が、そつと響き渡る。

アンジュの返事がいつまで経つても返ってこない。ライーサが不安になって目を上げると、アンジュはぼかんとした顔で、ライーサを見つめ返していた。

（ああ、やっぱり、友達だなんて……）

私には大きすぎる望みだったんだ、とライーサが後悔に似た念を抱き始めたその時。両手がいきなり濡れた手で掴まれた。

「も、」

アンジュが輝きに満ちあふれた顔で、興奮気味に声を上げる。

「もちろんです、ライーサ！ いつでも！ いつでもいらしてください！ わたくしも……ちようど、ライーサに同じ事を申し上げようと……！」

翡翠色の目をきらきらさせ、まるで身を乗り出すようにして叫ぶアンジュ。その顔を見ているうち……ふと、ライーサの目頭が熱くなる。胸の内にあつた固い強張りが、じんわりと解けていくような、そんな感覚。

「ライーサ！」

先ほどまで泣き出しそうだったアンジュが、今度は上機嫌な声で、無邪気にライーサの名を呼ぶ。

「何？」

ライーサが目の周りをそつと掌で押さえながら問い返すと、アンジュはにつこ

り笑って、追い打ちをかけるように言葉を続けた。

「ライーサ、わたくしたち、もうお友達なのですから、『あなた』ではおかしいです。ちゃんと、『アンジュ』と呼んでくださいな」

そう言う彼女は、どこか子供のような、楽しげで悪戯っぽい雰囲気です。

「えっ……」と、ライーサは思わず言葉を詰まらせる。思えばこの少女の名前など、一回も口にしたことはなかった。

「べ、別に名前なんて……」

「『アンジュ』、です。さあ、ライーサ」

何だか気恥ずかしくて、ライーサはちよつと怯んだが、アンジュが有無を言わせない調子で畳みかける。ライーサは観念して、唇をちよつともごもごことさせた後、ようやくその『友人』の名を、呼んだのだった。

「アンジュ」

……と。

顔に熱が集まるのを、止められない。なぜか、涙が出てきそうになるほどだっ

た。ただ、名前を呼ぶというそれだけのことが……こんなに、こんなにも複雑で、それでいて心地よい熱を心に呼び起こすなんて。

しかしそんなことをつらつら考える暇を与えず、ついに海面から身を乗り出したアンジュの手がライーサへ伸びる。そしてアンジュは、勢い良くライーサの身体を抱きしめた。

「ライーサ！」

アンジュがライーサの名前を呼ぶ。

「ライーサ！ わたくし、ライーサが大好きです！」

その台詞に、またライーサの頬が赤くなった。しかし、今度はきちんと、彼女はその気持ちに向かい合う。

「私もよ、……アンジュ」

と、ライーサはまっすぐに返すと、慣れない手つきでアンジュを抱きしめながら、笑ったのだった。

そしてその後……『約束』は交わされた。ライーサのそれは、きっとまたいつ

かイースラを訪れること。そしてアンジュのそれは、満月の晩には必ず、独力で完成させた『わたつみの歌』を歌うこと。それはありつたけの魔力を乗せて、歌い上げられるのだ。遙か、バストリアの浜辺へも届くようにと。

※※※

バストリアの闇の中、明るい薄桃色の髪が風にたなびく。

「行くわよ、セバスタ」

「承知いたしました、ライーサ様」

黒い小さなお供を連れて、ライーサは今日も、思い出が残る一族の秘宝を追い求め、旅を続けては街々をめぐる。だが、胸に寂しさだけを抱えていた頃の記憶はもう遠い。

かくして……バストリアの闇を照らすような、明るい笑顔の怪盗が、今宵も夜闇を盗み出す。

「天才魔術師にして稀代の怪盗、ライーサ参上！ 今宵もあなたの夜を盗みます！」

おなじみの前口上に続いて、華やかな呪文が、夜の街中にこだまする。

「ライーサ、イーサ！ ディア、ヴァル、アスター！」

たちまち壮麗な魔術の光が弾け、人々の驚きとともに、一陣の風が夜の街々を駆け抜けていく。その胸に、懐かしい夜が残した優しさと、蒼い海原が届けてくれた、新たな絆と希望を宿して。

【了】